



うたそら

第

1

号

2021

March

3

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄 「空」	41
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	52
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	54
次回予告・編集後記	55



相河東	@aikawa_azuma
アオ	@cocoaisgoo
青木夕海	@rim0910
青時	@madobenoumibe
青藤木葉	@konoha__ao
秋山生糸	@kiito25
麻数	@numberhemp
あさき まほろ	@mahoro_sy
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
朝野陽々	@asanoyoyo
阿曽辺かぎろい	@ai_2_siki
アダムス理恵	@adams_tanka
阿南周平	@scarecrow1409
あばがど	@abggg_d
尺崎武	@amagatak
甘宮雨	@hiyo10673
天野うずめ	@uzume_no_hijiri
雨虎俊寛	@amefurashi3107
新棚のい	@hccmono
有村桔梗	@chattenoire_k
あるこじ	@arukoji_tb
飯野太陽	@XftSh
五十子尚夏	
石川順一	@Hitler57
泉 葉子	@yoko00022
isk	@ks_i_sk
磯山武士	@takechan185
伊藤すみこ	@110sumikodayo

伊藤佃	@ci07004116
魚住蓮奈	@hasnan_mhd
渦	@in_whirlpool
碓氷藍生	@aioicecream
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
梅鷄	@ume_dori
泳二	@Ejshimada
hs	@hswelt
oat	@electronic_melt
江口美由紀	@miyuki_eguchi
榎本ユミ	@enomotoyumi1007
衿足	@har_mare
えんどうけいこ	@clematisilica
おうい	@katsushika_oui
大甘	@kajin_OoAMa
大坪命樹	@OotsuboMeiju
大橋春人	@hachidx2
岡田奈紀佐	@spice16g
岡田濫	@kakomiyano
岡野伸吾	@okanoshingo
岡本雄矢	@yuyaokamoto0331
奥山いずみ	@botanbooks
小椋杏	@ogura_anne
尾崎ゆうこ	@2019Yukko
小澤ほのか	@honokaozawa
音無 早矢	@otonashi_haya
音平まど	@nandemonaihi16
おもち	@mechanobiru
貝澤駿一	@y_xy11
@kaizen_nagoya	@kaizen_nagoya
がね	@amicus08
カラスノ	@karasunosan
涸れ井戸	@kareido1111
川原まりも	@kg0058
神奈備夕凧	@kannaginavi
菊池洋勝	@kikutitc
きさうぎなる	@nr_ksrcg

北の	@north0000kitano
北村美晴	@kame073
橘高なつめ	@coconutkikko
きつね	@001kitsune
木野葛紗	@blueregret
木村 槿	@kimura_tanka
京野パンダ	@kehunopanda
去年	@kyonen1223
きょんひめ	@gyonhime2
工藤吉生	@mk7911
久保哲也	@qtetu
黒あげは。	@mariannu0721
黒須紗里菜	@tuki1226
くろだたけし	@tkuro2016
蛍と水脈	
こうげつしずり	@umisorayoru
香村かな	@komukana
小金森まき	@koganemorimaki
古閑弓子	@yumikokg
小泉夜雨	@kozumi_yau
御殿山みなみ	@lookat2
近藤あなた	@anata_tanka
坂本	@31mojija_taran
酒匂瑞貴	@sakawa_mi
さとうはな	@s_hana111
佐藤水魚	@satohio_tanka
沙羅粗伊	@LT8MBfDEzzeHLq2
汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n
紫苑	@purple_aster
詩季	@4kitanka55
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi
シダタクマ	@s_i_d_a
島崎みとん	
嶋田さくらこ	@sakrako0304
西鎮	@xi_zhen_ivUT
雀來豆	@jacksbeans2
章生	@yaneura_neko

城山桜	@siro_saku14mv
水面狼	@wwolfater
鈴木 精良	@fufunag
鈴木智子	@cfun820_ts
鈴原ゆり	@lily-5290
諏訪灯	@_skydew
セサミスペースM	@sesamespace_m
千仗千紘	@Chihiro_Senjyo
蒼月まりか	@sooduki_marika
草流	@kusa2619
蒼音	@chari433
たえなかず	@suzusuzu2009
高木一由	@ka_to_ka_zu
多香子	
高階しらす	@takashina_ak
たかはしりおこ	@nashkrkr
瀧口美和	@abcdefghijklmiw
竹内亮	@takeuchiryo
武田ひか	@sunamerinikki
竹林ミ來	@chik325
田中翠香	@suikakinenbi
田邊葉月	@hazuki1815
田斗 かき	@herikutu_honpo
千束	@a_oneko
茅野	@white22autumn
千原こはぎ	@kohagi_tw
chari	@greenchari2
月岡烏情	@ujou31
月丘ナイル	@nyle_222
月硝子	@gesshodo
梅雨崎ナノカ	@tsunayama_
天国ななお	@momomiyam
道券はな	@peter_pan_co
堂那灼風	@shakufur
遠山文	@sksk_tnk
domina	@dominatanka
ともえ夕夏	@croissant_hey_z

内藤絡	@1ndigo016
中村成志	@nakam8
夏本橙	@natsumototou
波よこに	@urarensisu_
なるなる	@narunaru0825
新妻ネトラ	@NTR_s2s2
にう	@yuru11ne1217han
西淳子	@Jacky244Ray
西村曜	@nsmrakira
ネコノカナエ	@nekonokanae_uta
根谷はやね	@kaede9999
野添まゆ子	@kkjsk31
薄暑なつ	@hakusho_
箱囲亮太	@UdoncNdesu
薄荷。	@aie0himeco
はばとび	
濱松哲朗	@symphonycogito
春陽	@HARUHI_little_s
春ひより	@akiyuzu0224
ひーろ	
人々ひとり	@veryblackcrow
雛河 麦	@may_spica_358
piyomaru36	@piyomaru36
平井まどか	@hibinohomare
笛地静恵	@Ymcx6rhvjEZgwq
福山桃歌	@peachsong_521
藤田美香	@w_isana
藤森岬	@xk5RX1A8F46kakn
ふうみうり	@Am34Tt
古井久茂	@fulidom
細川エリカ	@lulvuvkasen
歩歩	@h_o_o_o_n
まきぞの	@amaibiscuit_
まこ	@maltase_cross
まさけ	@mskpompomfuwa23
真島朱火	@shuca_m
松本ユミ	@yumi28282828

真野ありか	@o_shironec
御糸さち	@MEATsachi
三浦くもり	@miurakumori
三浦なつ	@natsumiuraok
みがかそま	@hotarutonaru
深影コトハ	@cotoha_mikage
みずき	@hunnyhunter01
みそのみそ	@mis0no
みってる	@mittelfield
衣未	@mimi_4567
宮木水葉	@miyagi_mizuha
宮嶋いつく	@miyazima_izq
虫武一俊	@mushitake
六厩めれう	@mereumumai
村田一広	@mucci2018
八重森かもめ	@lazybirdcage_t
八重森さくら。	@yaesaku0329h2
山上秋恵	@akiemuroran
山川仁帆	@masaho0102
山下桂子	@tsuno_kei
結川澄衣	@sui_musubu
遊糸	@yuushi_3
遊星	@yu_sei9
ゆりこ	@b7282e_akaneiro
横雲	@yokogumo3
横浜ふみ	@nomikomiLAND
夜花	@yohana_no_sekai
夜夜中さりとて	@yorusari
うま	@llama_miyashita
龍翔	@oppizuntsuan
ルオ	@ruo129
瑠璃紫	@ruri_murasaki
若枝あうう	@WakaedaArrau
渡邊知博	
和田晴美	@hrm143ponta

たくさんのご参加
ありがとうございます！ 計 211 名

Sleepless sheep

相河東

どこにあるかも分からない踏切の音が聞こえる日は目が冴える
何十も数えた羊を放り出しジッパ―上げる寒空の下
いつもより妙に不気味な空間でいつもの気だるさ振りまく店員
街灯と街灯の間の薄闇に潜む何かに振るレジ袋
私的根拠があるから飲むのですこの先科学立ち入り禁止
酒飲んだ夜中だからと言いながら通話ボタンを押しててウケる
夜明け頃同時に押した終了が寂しさつれてぼつぼつ歌う
時間警察睡眠課が来たみたい今日が休みで安心したよ

菓子を齧って

アオ

自分への慰労で蒸した承和色のバケツプリンをお皿に移す
ぐりとぐら二匹が焼いたカステラが食べたいとメモが紙の端に
こぐまちゃんのパンケーキを食べるため本屋の近いスーパ―探す
大好きなアイスケーキを頼張る日 歌の期日で我が誕生日
あめちゃんと呼んだ自分が関西にしばらく居たと教えてくれた
子供らが神輿を取り巻き菓子貰う 私の町の謎な俗習
栗じゃなくさつま芋だと知りつつもモンブランの黄を口を含む
喫茶店出てきたケーキは猫型で食べるに困りとりあえず撮る

見過ごせる違和感

麻数

鏡にも意地張りたくてへこませた腹に自分を騙し朝風呂
黒電話使う子供のポスターの横でツイートしているおじさん
水に溶く味付きタンパク質それとキャベツで過ごす健康な日々
「生きてれば色々あるよ」の「色々」に昨日の義母の紅が艶めく
里帰りする度替わる玄関の置物僕への視線は同じ
仮釈放の時も再逮捕の時も平気で虹はかかったりする
見過ごせる違和感だけどカラフルなタビオカ吸い込む彼等も人か
不自然な場所で流れるJAZZを聴き不自然な場所で落ち着いている

Diurnal motion

阿曾辺かぎろい

木星を星の兄だと思ふ時事故死せる友シューメイカー・レヴィ・9
東京湾を廻遊し廻遊し柄シャツに描かれた魚は南へ還る
毎日来る死のためのエスキース砂塵を描くのは誰のゆびさき
単調なカット割られた日常に記名すアラン・スミシーなる人
東京の閑さされし庭団地とふ迷宮なればミノス牛あるか
洛中何処に描くのかゲルマン市亀戸を過ぐ金彩の月
青年神オリオン春に陰りゆき死体より出ず馬頭星雲
踊りたいマスクを獣の面コとし行き交う街に死者を迎えて

青い微熱

青藤木葉

もうずっと君を待っててこの街の青を孕んだ夜は苦しい
眩しくて一瞬逸らした星がありそれからずっと見えないはまだ
あまりにも似ていて違って戸惑った結果残った一つのボタン
卒業の日に渡されたお守りの意味が聞けずにまた春が来る
ペンケースの端から色が落ちていて君から貰った青が足りない
三度目の海が欲しいよピンぼけのカメラロールに風は吹かない
バスに乗りこの歌を聴き確かめる記憶のランプがまだ光ること
幾度目の回想…澄んだ瞳と正しい背中優しい拒絶

イースターエッグ

秋山生糸

暗やみで体温計をくわえれば隕石の味 深くへ浮かぶ
幸福な人間なりの欠落へサプリメントをダンプしている
雪解けの後の汚れた街をゆく卵をひとつ懐に入れ
天使、鳥、優しい色を拒みつつ空を突き刺している針葉樹
春風に毛布 曖昧なままがいい 茹でた卵を見破らないで
道のない世界で探したからもの楽しめているならよかったね
ほんとうのミモザがどんな香りかは知らないけれど おはよう おかえり
イースターエッグにきみが色を塗る思っていたより複雑な模様で

かうあげ棒のひとつを食べる

あぼがど

手のひらに落つ雨粒はいつだって柔くてきれいですこし儚い
不規則なメトロノームとして雨は時に僕らを音楽にする
(雨粒を弾くワイパーみたいだね) じゃあねって笑むきみが手を振る
いま最上川はどうしてるんだろう雨に打たれて歩く夕暮れ
煌々とかがやくオアシス真夜中のセブンの店員はまだ人間
星の見えない街のなか一等星代わりの赤信号がちかちか
雨風をしのげる屋根の下にいてからあげ棒のひとつを食べる
午前四時 濡れた道路を照らしては月曜を待つさみしい街灯

あんがいじんがい

尺崎武

肩甲骨よ翼になれと念じたが生えてきたのは腕だ しつぱい
うつ病に良いらしく朝日を浴びる ドラキュラであることを忘れて
だとしてもきみはおびえて泣くでしょう ぼくは怪物 会いに行けない
猫系に分類された飲み会で虎のわたしはガオーとうなる
だつてきみに笑いかけたりできるでしょう透明人間にぼくは、になりたい
ホッとしてますけど人は首の皮一枚だけつながっても死ぬ
心に生えたマンドラゴラを抜いたとき心は叫び声をあげて死に、体はそれを聞いて死ぬ
幽霊になっても僕を抱きしめて 多分ぬくもりくらいはわかる

サイレントライフ

天野うずめ

限定の雪見だいふく買うまでにくつも君のため息を聞く
キッチンに雑音はなく午後という光の中で煮詰めるりんご
待つことになるかもしれない図書館でゆっくりめくる恐竜図鑑
お互いに「だなも」「だなも」言い合つてなにもなくても世界は優しい
ときどきは窓辺に猫がいる家を左に曲がつて行くスギ薬局
アレクサが面白いこと言うときに一瞬はいる間合いの静けさ
ブランコのない公園へ一斉に集まっていく春の風たち
志摩リンに燃やされていくマツカサの声で痛みを分かち合つて

トヨナカガール

雨虎俊寛

飛行機が大きな街の駅前で大きな傘をさすきみがいた
傘預けお天気雨に飛びだして泳ぎきれずに濡れるブラウス
差し伸べた傘をかわして先歩きまぶしいふりで空見上げてる
花束は持ち合わせないそれだけじゃ振りはらえない傘の雨粒
雨は過ぎ見えないだけで晴れ空にいくつもいくつも星を見送る
歩道橋でしゃがんでしまうジェット機のエンジン音が遠のいてゆく
一日に4回虹を見れたねと雫のようにピアス揺れてる
しあわせのネジを巻いたらスターターピストルが鳴りわたる街角

三寒四温

有村桔梗

一年を生きながらへて春を待つあなたの首にマフラーを巻く
さみしさとともに引き抜く わたくしの熱になじんだ体温計を
またしても雪はしづかに降りつもり春の門扉はふたたび閉ぢる
白鳥になる あなたの街の気温からわたしの街の気温を引けば
ひつそりと去りゆく冬を倒立のまなこのなかに閉ぢこめてある
すこしづつ朝のひかりに含まれる匂ひが春に変はつてゆくね
たんたんと春の近づく足音がせまい耳孔をくぐつてとどく
あたらしい靴を買つたら沈丁花の匂ひをたどる旅に出ませう

おわりとはじまり

あるこじ

いつだって終わりにできるいつだって始めるときはそう考える
原色で終止符を打つどの恋もパステルカラーで始まっている
はじまりの町でいきなり最強の剣を売つてた店が潰れた
たったいま予告が終わり本編が始まる前に起きるさざなみ
多分この女優はラストで死ぬだろう今の台詞を伏線にして
すみやかに所定の位置につきなさいそして予想を裏切りなさい
完璧な逆算が今できたから割り勘にしようとうと決める
新居では生まれ変わろう人間は蛇ほど上手く脱皮できない

明星

飯野太陽

泣いている猫と小鳥と沈丁花僕が舐めたらみんな死ぬかな
暮れてゆく微かな夏と僕の愛独り善がりなもののは滅ぶね
これまでの記憶を全部消去して自惚れだけが底に残った
「これからはもっとマトモになろうかな」なんて言う君の瞳の黒
排水口みたいに無力に正しくて責任だけは取らないでいる
神様を信じてみようと思うたび北で鋭く瞬いた星
溺死した前担任の死に顔を毎夜夢見て深く眠った
明星の哀しさ思い鳴く鳥を今日の添い寝の友に選んだ

冬と風と王と

五十子尚夏

如月の植物園に見しものすべてに「復讐」の花言葉付す
Still lifeは静物画へと訳されてその水際に失うひかり
(眼を閉じてみれば)冬野に絶え間なく風のnecessarityという音
冬ざれの喫茶に開くマクベスに魔女現れて我に語りき
盗人は奪いてゆきぬわたくしの最も嫌いな人の名前を
人ひとり裏切りてこの夕闇は渡りに舟というときの舟
王として逝きたる人の美^はしき名を永遠に冠する橋を渡りき
如月の合わせ鏡を抜けてゆく風(うつくしく鎖されている)

日々の感慨

石川順一

足の垢部分部分に分けてとる取り終わるごとに信号が鳴る
今何時古代世界を切望し田仕事に励む男女に吹く風
今何時西暦の数字に置き換えて豊か過ぎる餌に干乾びて行く
枝垂れ梅螺旋階段錆びて居る私道を持たぬ我らの叫び
湯が流れシチューの汚れが落ちて行く銀色の鍋の持ち手は黒くて
スポンジの雫がシンクに落ちる時夜の電車は空を夢見る
乱世に威厳は必要緩んでも自分の顔にロックはせぬが
綿虫が頭上を行けば練習が虚構性帯び葉が着地する

ライムライト

泉 葉子

真つ暗な町に降ろされ迷い猫ライムライトをたどつて歩く
同情はぜんぶもらうよこの灰も大きな鎌も小道具じゃない
少しずつ額近づけこのままでいい?どこで生きるか決めてほしいの
あの世へは連れていかない思い出と全財産を奥歯に詰めて
傷んでる身体奪つてあたらしい夢を与えてあたしのタナトス
好きなだけ無理してもいいニセモノの夕陽おかえり水槽の家
オリオン座以外わからん恋人の普通っぽさがとてもよかった
今夜から冥王星へ里帰りおとぎ話が降る空抜けて

君がため爪先染めしわが恋もこの手のひらからつとこぼれおち
君がため春の野に出で花摘しこの指先も空をさまよふ
愛してる伝える指がかたつぽの貴方とわたしレベルが違う
覗き見た予測変換みずがめ座だから皆に嫌われる
「バカだから」線を引かれたもしかして僕は君の敵だった？
ありがとう 真心こめて言うけれど 君らはいつも「どうしたの？」
黄昏れの苦界に日継ぐあづま宮 虫を追うては笑み浮かべ
鳥告げる 妬み嫉みの暗喩たち いつしかそれが笑い種

ソフトボール部の墓

伊藤すみこ

イ・スノヨブに似ているねと言った春 少しでも縮めたかった距離
真夏日に耳元でだみ声をする わざと三振したればええよ
青黒く腫れた小指に湧く怒り 早退します、家の用事で
背が高いだけで選んだファーストがショールバンなんて捕れるわけない
退部する？してもええけど春休み、練習来いよ 行くか馬鹿たれ
やわらかくぬくまっている空間を本能として知っているはず
美術部で生徒会だからピアスを開けたお前は天才なのか
自画像がやけに上手な自分との向き合い方に悩む青春

ほころぶ

魚住蓮奈

小島なおよ君が独身だったなら嫁にして欲しかった白目
性的に少数派という言葉さえなかった頃の愛しいわたし
彼女とも彼氏とも寝た朝焼けはいつもおなじく朝焼けだった
手をつなぎあるく歩道におたがいの乳房のかたち思い出しつつ
くさりゆく花のかおりのふゆふゆとベッドはいつか舟に似てゆく
きみが見るバイ・セクシャルは人類をみな平等に愛しうる者
きみこそが炎だったと言える日がいつの日か訪れますように
沈黙のつぼみはいまやほころんで紅のあかさに目が眩みそう

目にしみる

碓氷藍生

ゆっくりと心中していることにして先生のタバコの煙を許す
白い吐息傘を忘れて恋の歌わたしはわたしのことを知らない
TVの好きな面だけ見ていたよきみは人形みたく綺麗だ
きみの目に溢れる青が痛かったまつげも青く染まっていた
カーテンが半分開いていて朝に私が存在していた証
そりゃ怒っていいんだよって言われててそうか怒っていいものなのか
駅弁のお米硬くて硬さすら愛してしまうみたいな夏だ
放課後にやるトランプの面白さほどのことはもうなくなった

屋上猿部

宇祖田都子

合鍵を渡されてより先輩を部長と呼べば猿部員なり
踊り場に白犀のいる階段を上りつめれば部室の扉
合鍵のざらつき方が昨晚の夢の黄砂に似てる屋上
でこぼこの伝言板に『ビー玉が砂にまみれてます』の消し跡
一昼夜部室に放置した壇に金魚一匹泳いでる朝
屋上で芋を焼いたりする部長マスターキーをもてあそびつつ
部長からマスターキーを託されて合鍵を元部長に渡す
白犀の眠りを妨げぬために継承される屋上猿部

どこまでも行けそうな青空

江口美由紀

キャベツではなく芽キャベツが生えてきてすこしずつなが遠のいて
永遠を見ているような小春日の待合室の義母のとなりに
ゆりさんと呼ばれればゆりさんらしく微笑んでいるつもりわたし
ブラームスを聴きブラームスを口遊み和らいでゆくほどの選択
行員の手前つとめてほがらかに指摘する義母のペンの上下を
こころにはいくつか簡素な家がありすべてに南京錠がぶら下がる
金までを書いて戸惑うひとへ鳴る小さな鈴と角ばった鈴
どこまでも行けそうな青空だった そんな気がして言ってみただけ

一日について

泳二

君が乗る電車はきつと真直ぐに走って来てはくれないだろう
君からの言葉はとても素っ気無く五月はすぐに終わってしまう
君を待つ時間を少しかっこよく待っていたくてグラデにする
君はすぐやめようかなんて言うから嘘をたくさん吐いて歩こう
君と会うのは雨の日が多いので小さなこともやたら眩しい
君だけの価値観のためあの店のあの耐ハイで乾杯しよう
君もあのニュースを見てた僕たちのことじゃないけど少し似ていた
君に今日撮られた写真透明な君を見ている僕だけがいる

ラストが違う

榎本ユミ

水際に足首くらい遊ばせて引き返すはずだったのに ねえ
ハイボール落ちゆく喉を見せている私の理性がかしげる夜に
我慢した傷がそのうち痒くなりまた傷になるような会いたさ
抱きしめていいのだろうか上顎のやけどを見せにきたりするから
きみじゃない人と前にも来たかもと気づきぬ 高い声ではしゃいで
ふたりでも孤独は孤独 銀杏が踏まれつつづけて街匂いたつ
うなづいてのみの電話にぐるぐると黒い羊が生まれゆくメモ
小説と映画のラストが違うこと確かめたくてときみを訪う

卒業の儀式

衿足

ひさかたの光のどけき春の日に背伸びをすればつま先も浮く
上ばきなんてもう一生履かなくてきみもあなたを忘れるだろう
口パクでうたつてごめん学び舎よバクハツしろとか願つてごめん
わらうから楽しいわらつていた日々を日々と呼んだら過去形になる
しりとりで速度で声をつないでは西へ過ぎゆく風にさらわれ
こんなにもかばんは軽く三月のプールは空を映しもしない
吹きだまるように門出をためらつて肩にさくらを積もらせている
さよならの代わりにはなびら、と云つた 手をふる代わりに枝をゆらした

冷たい生き物

おうい

満月の光届かぬ海底でシーラカンスが見る花の夢
眠そうな嘘の目二つデメニギス光纏つて深海を行く
真夜中のシンクで蜃気楼を吐くボールの海に蛤五つ
アロアナが飼えるくらいの水槽に植物だけが寂しく揺れて
毒を持つカエルみたいに美しい色を抱いて毒を持ちたい
見つければロマンは消えてしまうからくしゃみこらえる遠野のカツパ
舌打ちを我慢しているイグアナも声が出せれば月に吠えたい
翼竜が西の空へと飛び去つて今日を明日へと繋げてくれる

かくてろ

大甘

ぼふぼふとミッドナイトをゆくバイク上手く吹けないテューバのような
死んだなら生まれ変わつて校庭にドラムセットを持ち込んで、さあ
気付いてた？ 山里くんがときどきね 一瞬、逆再生してるつて
カクテルを教えてくれたおねえさん 彼女の好きな歌手の新曲
月面のリトルトーキョー生煮えのイングリッシュで凌ぐ荒波
白昼のコインショップで安売りの満州国のお金を買った
いま胸を過つた夏は過ぎた日の熱か半年さきの光か
臍帯をながれる河の血の色 俺色青い母色に似て

繋ぐ手遠かりて

大坪命樹

傷付くるを傷付けらるれば涙目にて送るは桜が写真メール
ホームにて軋む鳴き声いつよりかサンダーバードの渡鳥なりにし
老体を嘆けばきみの笑み寂しげ さらに一度零すまじとぞ
別れ際フランペチーノのお裾分け 次飲まるるまできみよ儘たれ
煤落としきみ帰らむ日に備へれり 夕の蟬声涼やかなる風
炊事中きみ口ずさむメロディの世に古れぬるも鮮やかなるかな
疲れ伏するきみの傍にて無力なり 露けき道に車通る音
紅の差す白峰険しき暮れ空のきみとの散歩の帰り道かな

はるのうた

大橋春人

三月の夕の長さよ引つ越しをせずに迎える八度目の春
夕暮れのカラスの嘴はうつろ人間だけがマスクをつける
流星は宇宙ごみだという人と冬の終わりの空を見ていた
ゴミ箱にマスク溢れて春ならぬ春を今年も迎えるだろう
間違えたことだけ思い出している後悔の季節としての春だ
韻律が不自由になる樹の下に見捨てた人の顔がこぼれて
人類の原罪としての花粉症われも人間ゆえにくしゃみす
夢もなく魔法もないが三月の雨は静かに暖かく降る

四則計算

岡野伸吾

まっすぐに見つめましようよもしかして二人の愛が廃棄物でも
「赤い糸」 検索履歴を見てしまった右手にだつて自由はあるの
引越しの空白に置く石像はあなたの息を集めて作る
触れないで他の人にも触れた手で私の鎖骨だけを愛して
浴槽に私の死体浮いているもう何度目の情景かしら
たまゆらにどうせいつかは死ぬ命あなたの骨をしゃぶっていたい
私だけのものではないとわかつていた金魚は宇宙へ飛んで行った
恋愛は四則計算ではないと教えてくれたあなたがいない

雪八景

岡田奈紀佐

NHK天気予報の雪だるまマークに会える季節はいいね
東北の義母から届く雪景色 ここは遠いね、乾いた地面
鍋の底に沈んだ鰯に知らせたい明日の天気は雪になりそう
国境を見たことがなく国境を越えゆく雪も見たことがない
たまに降る雪を愛しているだけでパニアアイスを選んでしまう
煩惱の数より多く降る雪のまつげの先に積もりゆく白
あたたかな部屋のガラスは結露して音もなく降る音だけを聞く
一面の雪原もしくは永遠を見たいおそろく似ているだろう

革命

岡本雄矢

水色の革命起こせ正装は青Tシャツと白コンバース
マイナスとマイナスをかけてプラスという意味がまだによくわからない
国境を飛び越える時ジェット機はベリールロールになつてゐるんだぜ
1万円貸してください友人の答えを待ってるキスアンドクライ
無駄のない完璧なフォームで歩いてる帰宅部エースの小野寺亮君
信号を渡つたとこのコンビニは帰りは渡る前のコンビニ
自転車で豪快にコケてやつぱりかこの夏最初の半ズボンの日
革命は誰かが起こすと皆思いなんにも起きない2年3組

容易さにまもられている手のひらを炎にかざせばほのおに染まる
 青空は実際それほどあおくない 良くないくせに「いい」と答えて
 汗と汗、それからなんかの分泌液 わたしときどき、死をかんがえる
 「たいくつ」と裸の背中に書きながら爪が伸びすぎていてかなしい
 思っていることはひとつも話せない 花瓶の中の枯れそうな花
 かるい骨をもって飛ぶのが鳥ならばどこまで地面を足ですすめば
 まよいこむように愛していた人がいたんだ微熱に身体ふるわせ
 きつと嘘なんかじゃなかったこんなにも川面のひかりのように走って

待ち合い室にて

はだ寒い病院の待合室に生き生きし過ぎるフェイクグリーン
 おしゃべり好きの伯母から電話あり三夜続いてふつと途絶えた
 荷ほどきをしてない箱が3つあり 殴り書かれてる承・転・結
 ゴムの木が見下ろす近所の図書館のランナップに偏りがある
 正月は帰れないね、とラインした手に持たすように買ったアネモネ
 泣かなかった。玄関で閉じた傘の端に花びらひとつ連れ帰るまでは
 ゆっくりと酸化していくスプーンで昨夜残したケーキをつつく
 ベランダで拭くガラス越しに映るのは私がいけないだけの日常

十一月 君の異動の張り紙に動揺してる私がいったり
 目に見えぬ場所へ行くならともかくも隣の部署に異動するとは
 好きですと伝えるでもなく伝わって距離を置かれてしまったようで
 何回も話しかけてもすげなくてもうダメなんだと諦めたくて
 諦めることができれば楽なのに諦めきれない諦めきれない
 そんな時君から言葉をかけられた「いつも編み物やっていたよね」
 大丈夫もう大丈夫少しでも私のことをみていてくれた
 君のこと忘れることはできずともきつといつかは諦められる

勇者E

うれしくもないのに夢をみてしまう もう泣かないという主人公
 ゆうべから何にも食べていないけれど満足そうにしているモブB
 草笛の音がBGMになることはどうやら新しい街
 この屋根はあたり判定がないです 勇者のあなたにだけ教えます
 日が差せば だんだん弱く dim. になってゆく勇者はちよつと頼りないです
 「求人に時給1200円だとあつたから来た」——勇者の仲間F
 勇者には危険手当は付きますか？ あつ、別にないならいいですよ
 勇者だつて小さい頃の消しゴムにちゃんと名前を書いていたんだ

ばかものよ

うらなりの末弟の肩に降る花はひかりを巻きこみながら
 ブレザーが見る空のゆめ海のゆめポケットのなかに日々があること
 草原に風が吹いたら道ができるきみが駆けぬける速さでもいい
 ばかものよ 守るべきものをさがしてはいけない守ってきたものを守れ
 残るべきひとらアーチを組み上げるヴェールの向こうあたらしい風
 いつかきみもスーツが似合うようになるばかものだった日々も愛せよ
 捨ててしまう地図をひろげて三月の空は無名のきみにかがやく
 「じゃあ」といえば「また」が続くと思うだろ 風にかき消されたそのあとも

佐伯裕子への返歌

子供とか配偶者とか英語とか何度叩けど送信できず
 素晴らしく楽しいというかたわらで雀も踊り私も踊る
 鳥になりほおずき小川を行き来して日がな一日暮らしていたい
 菜畑を絵に描き風をあつめてとあしたてんきになれと友いう
 にしひがし武急横浜有楽町2019相鉄つなぐ
 帽子なくドン・キホーテになれぬまま風を描こうよ空色のクレヨン
 見つけた夢の切れ端吹奏でクラリネットの響の反射
 山折りに紙を合わせて冬の日の手紙は生者へうろろいくか

神に近い生き物

まずひかり、ではなく音を創り給う子守歌から始まる神話
 胸元に笑顔で眠る似姿にわたしも神であつた日がある
 泣く前に吸い込む息は生きていくために吸い込むこの世の息だ
 母乳へと姿を変えた血液を与えてあなたをこちらへと呼ぶ
 洪水をかつて起こした泣き声のいまだ知らない24時間
 わんわんもぶーぶーも世に創り出すあなたは神に近い生き物
 ドア一枚隔てた先で子供らの声駆けていく午睡の隙間
 神様は残酷なもの絶滅を忘れさせたる恐竜広場

二万円

推し漫画ひたすらに推す番組を録画して視る仕事帰りに
 漫画好き外国人や芸人が好きな漫画をめちやくちゃ語る
 この冬は電気代月二万円テレビデオを買ったせいなのか
 二十年以上やってるバラエティ番組のキャストの知らぬ顔
 新顔の芸人の落ち着きぶりでテレビ文化の変遷を知る
 あつさりとメモリー埋まり連ドラに追いつけぬまま年を越したな
 雪掻きシャベルの切っ先が欠けたら些細な願い叶ってほしい
 オンライン書店で買った漫画本帯の破れが少し気になる

わたしのすがた

川原まりも

降り立ったその瞬間から水彩でゆらゆら揺れる光の方へ
眼裏を誰かが過ぎる一瞬の長いため息失語症の鳥
追いかけてふと気がつけばひとりきりもう何度目かの影踏みの後
色彩を重ねる度に浮き上がる輪郭の様わたしのすがた
街灯のともりはじめる鈴の音を順番に聴く夜はもうすぐ
光源をなぞってつくる街路図のどこにもいないわたしの温度
鳥籠の隙間を縫って駆けてゆく子らの背中が引き摺る羽音
滲んでは夜の向こうに延びてゆくバードノイズのアーケード街

春に置いていかれる

神奈備夕風

「お前ももう二十歳で大人なんだから」手近なものから色を失う
さまざま祈りのかたちに立ち眩み私は春に置いていかれる
気休めに行使してみる言霊が恐ろしい人向けの黙秘権
宵の春さまよう私を他人事という距離のまま笑ってほしい
好きでした初期段階の正しさがやっぱり大人になりたくないな
足並みが乱れ始める卓上の暦は「二〇二〇年九月」
単純に生きていきたいの明確な志望動機がたとえなくとも
寝る前に一回一錠現実を逃避してみる（目が冴えていく）

それらすべてを抱いて眠ろう

菊池洋勝

隣より柔軟剤の空気入るそれらすべてを抱いて眠ろう
花を見に行ったベッドや空となるそれらすべてを抱いて眠ろう
手術後の立つ練習に見やる空それらすべてを抱いて眠ろう
空欄に入り切らない既往歴それらすべてを抱いて眠ろう
七階にある病室や秋の空それらすべてを抱いて眠ろう
空腹を満たす毒かな彼岸花それらすべてを抱いて眠ろう
新薬の研究進む冬の空それらすべてを抱いて眠ろう
病室は開かずの窓や冬の空それらすべてを抱いて眠ろう

花の精霊

橘高なつめ

なまぐさい風吹きだまる春先に折り目のついた喪服をゆずる
水滴が流れる窓の冷たさとマスクのうちに籠もるつぶやき
桃色の綿菓子でしようあの雲は 口の寂しい子のひとりごと
心配をよそにおどけて水銀の体温計をかざした空に
ふしぶしは腫れてみにくい若き日の古いリングはもう嵌らない
うつむいて歩くわたしの影にふる赤いツバキの散らばりぐあい
ものすごいスピードで追いかけてくる夕日に噛みつかれた踵が
枯れてゆく花から逃げる精霊を呼び止めるしわがれた歌声

チャモチャモ島へ

きつね

君はもうりんごやもじゃ喜ばずピンクのグランドライトを探す
400ベルにしかないというさいいし ついでに鈴木が悪口も言う
ジャスティンのカウントダウンが始まって花を散らした欲深い足
かと言って売っても安い値段だし余ったレシピはチャモチャモ島へ
誰か死ぬことはないけど幽霊とはかいしはある入りたいやつも
偽物の方に惹かれる触ったらぶかぶか浮くし目も光ってる
フレンドの島でもらった物だろうネコのトイレを設置するたま
雑草が増えるくらいで人ひとりいなくても楽しげなこの島

夏のおわりに

木村 謹

ふるさとは時間をかけて変わってくコンビニ二までは徒歩20分
ばあちゃんの生きがいとして生きている須田商店の古びたポスト
あのころは果てしなく遠い町だったきみが越してった隣の町は
裏庭のちいさな墓地にねむるのはビー玉、金魚、骨型のガム
ロッキングチェアは記憶とうたたねを行ったり来たりしてる乗り物
玄関のピアノは歌わなくなっただきくなった家が鳴くだけ
テトリスのようにふるさとの銘菓を詰めこんでゆく夏のおわりに
駅前の文房具屋はもうなくてタイムスリップは二度とできない

PARCO に行った

去年

ピリオドをあちこちつけたきみが来たドットワンピにくるむ春風
快速の方が早いと言いながら普通に乘った スマホをなだめる
この人はジイさんなのかオジさんかわからないまま席を譲った
20%offの計算するときに8をかけてるぼくを見ている
ミラノ風ドリアを頼むミラノでは半熟卵乗せないだろう
帰り道、言葉の泡が弾けない。言葉にできることが嬉しい
右脳から左脳へきみを移してる手を振る時にそんな気がした
着るまでは新品だったこのニット古くなること受け入れている

オーマイ ジーザス

きょんひめ

伯爵に平和園来てと言うたけど実現せずにコロナの世界
伯爵のマスクした顔みたことないわたしの日常には存在しない
光冠茶会 カヒミ・カリイが母となり花を活けるはニキって娘
新しくできた教会その悩み地域の民をぜんぜん呼べず
つまらないオンラインの礼拝はすでにラジオとなりつつもある
神さまが楽しいこととにんげんが楽しいことはきつとズレてる
キモノきてネット礼拝守るとき眠気ざましにキツイ着付けよ
「聴く聖書」愛のことは容易いが君は同時に傷つけている

未発表千首より・八九から九六

工藤吉生

卓球でちょっと遊んだこともある小野さんはもう遠い人妻
グラサンをかけた自撮りが待ち受けの高野が悩む ヒュッと励ます
走ってる人が急いでいる顔をしていてこれがよく合うんだよ
客のない洋服店の店員がなんだかんだをひろげてたむ
雪合戦の音が聞こえる 悪を倒すために投げるといふ声もする
「やめなさい」ばかり言われるヨソの子の声もひっくりくるめて昼寝した
カードから金の抜かれる夢を見て六十分の眠りが重い
日の暮れた道を歩いて影だったドブだったもう会えない人よ

水属性の本

久保哲也

「オアシス」と名付けてあげた背の青いノルウェー産の鯖の切り身に
海を見たことがないならおじさんがちよつとものまねをしてやろう
「恋をして前の仕事は辞めた」とか言いだしそうなほど林檎飴
本当にごくありふれた枝でしたあなたがおみくじを結ぶまで
泣く前に妙に明るいい人がいてゆつくりとした破裂と思う
オレンジはキウイに比べまごころに近くて坂を転がりやすい
駅にある「善意の傘」がたどり着くいちばん遠い場所を知りたい
そりやあまあ逃げちゃダメだと思うけどアフロにするのもどうかと思う

濁声^{だみこえ}

黒あげは。

衰えて日に日に痩せる老猫と産まれたばかりの赤子を抱え
老猫はトイレの側で慎ましく粗相もせずに途絶えた濁声^{だみこえ}
死と別れおまえが初めて見送った2000gの家族は空へ
人だけの暮らしに慣れた筈なのに服に遺った猫の毛連れて
変わりなくお元氣ですか路地裏で時折会えた2丁目のボス
コンビニに張り出されたる迷い猫家族会議は全員一致
咳き込まぬ吾子の寝顔を見守りてゲージのなかで寄り添う仔猫^{だみこえ}
濁声でねだる仔猫は亡き猫の^魂だましい宿りまた抱かれおり

空

黒須紗里菜

太陽の上に広がる雲はなく近く見えても遠い存在
カプチーノの泡になれない多摩川の泡はひたすら直線をゆく
太陽のまちがい探し朝焼けの高さをこえて飛行機は飛ぶ
象牙色にノートがかわる朝7時の実習室には無音の人々
7色にミンティア光る朝靄の中からのぞく白い太陽
太陽の光線のびて菊の花に朝日が見える広い青空
剣山にリングノートの影かわる右のページは花の名を書く
無機質な窓になりたい太陽の輝きにでも負けないように

救い

くろだたけし

白すぎる光のしたの干からびたシンクを濡らしていく朝の水
すぐ古くなる新しいものを作る巡り続ける鳥たちに空
食前と食後の不毛な打ち合わせ試しに飲んだ胃薬が効く
絶妙に不快な音の警告に吐いてまた食うみたいに慣れる
そのうちに徴集されて旗を振るちゃんと望んでいなかったから
もう進化できないのかな降りてきた天使がみんな武装している
音楽を止めてそろそろ沈黙を受け入れましようわたしのために
おそらくは二度と会わない人からの笑顔を持て余しつつ受け取る

ゆきどけ

香村かな

いつになく早く目覚めたりビングでひらくメールに桜の絵文字
そういえばまだ言っていない約束の温度を指で確かめている
だからもうやめるつもりでいた春を駆きたい妄想サイクリングで
じゃあまたね。余韻のせいでこの先もしあわせだからたぶん永遠
どの青をえらべば君に合うだろう春の日差しも少し加味して
もう終わる白い世界に佇んでいるあの鳥はきつと夢だね
春からはまた忙しくなる君と肌寒い日を共有したい
ほら四月。色づいていく者たちは深呼吸することも忘れて

短歌はじめました

小金森まき

ただひとり言葉の海に飛び込んで泳ぎ方など知らないままで
料理中洗濯中に掃除中 頭の中に歌詠む小人
TLの二行以内の文章がだいたい短歌に見える三日目
切り捨てか一字を足すかそのままかどっちつかずの六字に悩む
選ばれた言葉の裏で捨てられた言葉を拾って鞆に仕舞う
音楽を奏でるように指先を弾ませ歌う静かに歌う
漫然と生きた日々にも我がいて心があつた、と思ひ出す日々
楽しくてただ楽しくて楽しくてずっと言葉をこねまわしてる

咲かせたままで

古閑弓子

空想の街の名前を呼び合ってそのいくつもが雪解けのころ
胸を張る鳥のまなざし涼やかにわたしのいない遠くを見る
してもらってばかりでごめん三月は花束みたいにいっぱい会おう
透明にいつもなにかが仕切られてそれでも届く春のひかりは
また涙もろくなってる 星光ることを臨界点として立つ
白い紙に無数の文字を書きつけて炎えてこのまま海になりたい
ねむるように生きていたいよ 花瓶には水とひかりを咲かせたままで
両腕を広げてごらん今だけはすべての泉が涸れないように

報酬と天国

小泉夜雨

湯豆腐を掬ふときあなたは雪を、わたしは砂を思ひつつする
広告を見た報酬としやつくりを百遍したらゆける天国
こんなにも大きな恋はいままでになかったですと睫毛を伏せて
幸福はしらないやうな顔をして路地の窓辺をとほつてゆくね
切り落としたで世間に疎いけどやさしい色の小指をどうぞ
むらさきはよくない縁起とほざかる一輪挿しに咲くあかねさす
生物の時間になにを学んだの狸ばかり侍らせてゐて
語られたとほりの暗いゆふぐれに境界なんてなかったやうな

平成のエイリアン

御殿山みなみ

目薬のように睫毛が受ける雪 いや、みぞれ、いや、もつと雨寄りの
つけた瞬間紐ぶちぎれたマスク見てそのあとに見るセブンイレブン
あすの仕事はあす来るんだな行けばある原寸大のテーマパークよ
福笑いの片づけられたあとの顔、だれにもないと思っていたい
気づいたが指は分岐でそれぞれを動かして掴んだブラモデル
死んでから輝くひとが ぜったいに花輪の茎に先端がある
暗闇にうごめく影があなたへととなるまでのあいだの物体
語ったら終わる話を持つてると思ってるなら池を覗いて

こころのうちは、そとがは

近藤あなた

この部屋は黒が足りないさう言つたわたしがとても黒かつたのだ
おほかみをこころのうちに飼つてゐてそのそとがはに檻はありたり
「上がりなよ、何もしないよ」と言はれて上がつてしまふわたしうちは
リビングに子供のおもちや 玩具とはこどもが遊ぶためのものかは
「だいちやうぶ子供は親に預けてる」そんなことなど聞いてないけど
期待ならしても良いよこの部屋に上がった時に諦めてゐる
器だと思つてゐたらヌーブラでヌーブラだけ器のやうだ
おほかみを無理やり起こすほんたうに大事なものはそのうちはに

おんなと家族

坂本

母は姓を捨て故郷こきやうも遠いこの土地でふたりの子と放たれた
若い頃あなたの帰りは真夜中で、私ひとりで月を見つめる
真夜中に彼の作つたラーメンを少し奪つて食べる未っ子
中学に上がる頃には長子が反抗期に入り、うまく笑えず
大人しく何を考えているのか分からぬ未っ子宇宙は広い
泣きながら一緒に死のうと包丁を娘に向ける分らないから
唯一のふたりをつなぐ花東は、毎年忘れず3月にくる
好きなききに起きて、ココアの一杯を。家事は嫌いだ、笑つて転がる

はるのはなうた

酒匂瑞貴

声のない唄の聞こえし人混みにいて揺れもなく咲くハルジオン
傍にただで良いって思つてた頃に芽吹いた菜の花を摘む
白線を踏んで歩いた大人にはなれない我を見送る蓮
蓮華草つんと摘みとる帰り道無口なままの恋でも綺麗
君の声こころ深くに閉じ込めて勿忘草は空を真似する
貴方まで届かぬ飛距離で散っていく桜の花弁は涙のかたち
フリージア玻璃の花瓶は冷たいかあの人のいた春へ帰るか
君がよく口ずさんでたハナミズキ百年続く愛があること

明日は遠い未来だ

さとうはな

地球上さいごの二人の顔をして海への坂を飛ばす自転車
見えぬものだけ永遠だ 砂浜に並ぶ鞆に小雨がかかる
「早春」と発声すれば海原にひらく帆船、風を光らせ
両の手はポケットのままあまりよく知らない歌の輪唱をした
今だけをきみと笑つていられればいい明日とか遠い未来だ
くだらないことを聞きたい 遮断機が上がれば街はしろうく光つて
落書きにまみれたベンチでじゃがりこを交互に食べた きつと大丈夫
木蓮はまだ蕾だというきみの声が汽笛と重なって、春

水中のブルミエラブソディ

佐藤氷魚

バスタブの排水口に生まれ出るコロネみたいな渦を見ていた
羊水に包まれるようゆらめいて呼吸もパンもいらないうち
宵闇に浮かぶ藻草のトレモロに豆電球が明滅をする
水面の上のひかりを目指しても目指さなくてもいい泳ぎかた
透明の壁のむこうで黒猫の両目に深い月いろ溜まる
生い茂る珊瑚の枝に阻まれてふたたび底に沈む巻き貝
奇数つてどこか偏る心から見覚えのない泡が噴き出す
やわらかい水の天井破つたら満月の瞳と三日月の爪

象ーかたち

沙羅粗伊

柱時計のデジタル音は違和感 裡なる螺子の軋むまひる時
十連の綴らなる歌陸月記に籠の家温き炬燵上に
見上ぐれば凍夜に走る寒星の痛き裂傷鎌鼬
満月に跳ねる海豚や悲しがる蒼のえのぐの透きとおる海
「夕飯は外でするから」…引つかけたシャツの破れに指通す
冬空に投げ上げた球放物線 〆に溜まる君の象かたち
黙の朝卓山越えの雪ひとときに街塗る冬景白閑かなる
まだき春か細き瀬音雪下に春待つ森は猿の遠耳

星と雪のまち

汐射ハルカ

朝焼けのビルの間隙点すのは明けの明星出掛けるぼくは
温かさ胃の中に滲む道すがら冷めゆく星と夜の風花
灰白い頬の乙女は内在す清き泉と熱い脈動
湧き出でるひそかな水に手を浸し漱ぐ舌先すぐ初冬在り
うら若きをとめは何ぞ覚ゆ哉闇夜の空に北斗七星
返答は醜聞を越え到達す届けココロよ氷点下なり
新月も満月もある中空におわりなどないはじめなどない
氷柱からこぼれる雫襟巻に染み込むまちは瑠璃色の空

揺れて

詩季

ショートケーキ食べ終え揺れてすぐ避難人生の汚点無銭飲食
携帯の「だめだやられた」に問うているそれは何かと震える指で
津波とは黒壁の水かたち無きものが隠した色と質量
声のない慰めでしよう星たちは全てに降りる全てに等しく
新聞の残酷ずつと未来へと広がるはずの彼らの名前
爆撃の景色と匂いが広がって誰もが見せる困惑の色
揺れただけならば許していただろうその日の大地ふるさとの海
電柱は斜めに生きる忘れるな備えよと立つ今日も明日も

前世は双子

鹿ヶ谷街庵

君が編んだマフラーぐるぐる巻きにして（嘘なんだけど）めちゃくちや寝る
キスのときフェイントかける ひな鳥のような顔した君をみたくて
甘栗をむくスピードがおんなじで前世はきつと双子のぼくら
注がれた紅茶を派手にぶちまけるこんなときでも神様は留守
イヤフォンは小さな天使 寄り添ってやさしい歌を聴かせてくれる
心臓が野薔薇のとげで痛むのは恋がはじまるサインでしうか
なつかしい数かぎりない歌がありいつか超えたい言葉があった
図書室で眠ってしまう読みかけの穂村弘に取り囲まれて

冷光

シダタクマ

枯野なるよをくらがりて迷ふ身はつきのあかきもほむらと覚ゆ
みのよどのよごとふゆらむはふれどもはふれどもこのはらの冷ゆれば
この身こそほりとちめとむすぶ手にはやあふれてはひびのちりたり
ゆるゆると零度の宙を来しひかり気圏に散りてあをのそらなす
風おるる空の青こそ冷たかれかきし梢に日の散りけらむ
茜さすゆふべの風のつめたきが貫きたる穴をながめてをりぬ
よにかけてみつるを俟たぬ弓張のつきのあかきもみには冷たし
身のうちに光電素子に似たるあり光受けなば呪ひ放たむ

やさしいひと

島崎みとん

友達をひとりなくした帰り道恋人になった東武線治い
変わったのはお互い丸くなったこと変わらないのは好きだったこと
空腹も眠気も顔に出ちゃう人嫉妬も好きも全部出る人
探し物は諦めたところに見つかって二人を繋ぐ金色の闇
「寂しいと病むのは普通」と励まして無理しないこと教えてくれる
沈黙が苦じゃないどころかお互いに作業をしだすサバサバの伸
手土産のドーナツの味迷わない7年の縁伊達ではないから
右腕のマッサージからはじまって「今日なにするかあ」日曜の朝

会いましょう

嶋田さくらこ

幸せと聞かれるならばしあわせと答えるでしょうランチタイムは
いく度か問う問われるを繰り返し午後のコメダのぬるいコーヒー
十年をきみと過ごして春に死ぬそういう生まれ変わりをしたい
北海道はいいところだねあんなにもアスパラガスを空に伸ばして
食パンの耳が好きです話すとき少し目を伏せる人が好きです
唇に触れつつ話すきささぎのリップクリーム塗り足りない
そう言えば髭があったなもう二度と会わない人を夜に沈める
会いましょう、いつかあなたと見た空とキットカットがあればうれしい

カンナ

西鎮

泣きそうな目をした雪だるまばかり子は作りおり別れも知らず
ポケットにちさき化石を忍ばせて時々さわるから生きられる
不揃いのマグカップまた温めてコーヒーを待つときの静けさ
余熱だけで鶏胸肉はほぐされてあわないうままで春が来ること
ベッドから雪をみていたその肌を黄金比だけ僕にさらして
冬薔薇の棘にふれては融けてゆくあわ雪だけをみてきみを待つ
ピスタチオの殻を砕いて如月の欠けたぶんだけ春へ向かおう
カンナ、いま生きていたなら二十五のきみを思っ選ぶ花だよ

ピアノ

雀來豆

目覚めるととりあえず水その水を求めこうして舟に乗っている
黒鍵の罅をたどれば届くだろうかピアノのなかのやわらかい場所
罌粟ひそやかに咲くぼくたちが夜だって思いこんで寝ている屋間に
ドラマーが歌手を兼ねるからってくり返すピアノマンの暗い口腔
図書室の奥には遠つ国ありてかすかに栂榴の花の匂いす
春の歌ちいさな指の練習はピアノのいちばん高い音から
いつ来ても留守だったのだと言いたげな老調律師の白い口髭
雪道で転がり落ちる鞆から古い楽譜をひらひらさせて

ねむりの果てに

章生

玉葱の芯のあたりに丸まって生まれてきそうなわたしの呼吸
発酵するヨーグルト生きているこんなにも水をはきだしながら
鳴り止まぬ踏切の鐘 セミたちの声に重なる夏の終わりを
もう雨が…だからといってこの夜の花の香りを走るしかない
沈むにも浮くにも月が泣いているようにも見えて月、赤い月
くれないの花びら散らしゆくように夕陽は光を失くしていった
どこまでも深く深くとききのねむりの果てにある柔きもの
手品師は帽子をとってお辞儀してスカーフひとふりわたしを消した

冬の鉄道

城山桜

みちみちと詰め込まれたる乗客は肅々と石炭になる
混み合った朝の狛犬ポジションで抱っこ紐から「阿」の口のぞく
忘らるるビニール傘の幽霊が座席の端にいてもいいのに
この風はいつか止むのを知っている通過電車をやり過ぐす猫
扉から春の兆しが乗り込んでくしゃみを誘い出そうと図る
最寄り駅ひとつ手前が終点の普通電車で揺られていたい
終電に乗りそびれたる背中からリュックの鯨が牙をむき出す
冴ゆる夜をあやす列車の音を聞き子らの臉は緩みて落ちる

別れの春に

水面狼

二日前あなたのくれた風邪薬全然効かない熱は冷めない
う、の時の下唇が好きだから「さよなら」で行ってしまったないで、お願い
雨音のせいで聞こえぬふりをした虹が架かって一人は独り
左側の空白にはまだ慣れなくて釣り合いを取る為のシオルダーバッグ
人がまず忘れるのは声なんだってささやく君を思い出せずに
カーテンのまだ無い部屋で星のない空を見上げてここは東京
下巻だけ貸したまんまの空白が唯一君の不在証明
あなた柄のコートはゴミに出せたのでああもうきつと春はそこまで

立春

鈴木智子

さてここからが本題です。立春の頃にほぐれる本音を抱いて
立夏より丸いかたちの心地して立春は来る 両手で受ける
君の言うれもんはきつと甘くって爆弾になんかなりやしないよ
本当に正しいものがあるのかな星を描くときゆらぐ黄の色
虹と言う概念を知る(あれはひかり) ランギンカマンという名のひかり
かんたんに覚えた祈りを冗談で連呼している そんなものかな
こんなにも日々は穏やかだとしても錨を下ろす場所はまだない
一面の菜の花畑に出逢うとき思わずわたしは帽子を脱いだ

ジグソーパズル

鈴原ゆり

好きな絵を初めに探すおとうとと四隅をそつと分けておく兄
真剣な表情で持つひとピース小さな指は汗ばんだまま
糸のこで初めて作った木のパズルやすりが甘くてささるすいばり
ダンボールハウスからによきつと並ぶ足静寂また話し声
ご飯の時間を知らせるのも躊躇うほど時を忘れたハウスの住人
貴方とも共有したいこの時間このままずっと続けばいいのに
片付けず出したまんまのあのパズル分かってくれる貴方でよかった
ハウスの中氣づけばそこに置き手紙父と子供はパズルで繋がる

朝の夕暮れ

セサミスペースM

メロディーをたべてしまえば聞こえないゆっくり眠る朝の夕暮れ
「ゆうぼとけ」の幟が立つレストランのサービスは？ 頭の体操
散歩して疲れて休む団子茶屋知り合いのいない町の時間
中野駅でスマホ握り君を待つ「なかのおおえのおうじ寒いよ」
黄色の線の内側を歩く駅員の特権 列車のライト
鳥の鳴き声と雨を踏む音さえ聞き分けられないなんて詩人
そばだてるアスファルトを走る台車の音がする犬の声がひびく
あの人の立ち話ってゴスペルを歌っているように見えませんか？

いの春

諏訪灯

子を抱いた重みは腕と骨盤も覚えていると夢で知る朝
山並みがぼんやり見える日が増えて遠ざかってく冬の足音
初耳のさえずりを聞く この街を鳥たちはまだ見捨てずにいる
スギナへと近づいていく土筆たち今朝もホームで観察している
ほころんだ花を愛でてく通行人空き家の春も誰かのために
蜜だけを吸われぼとりと落とされた花を拾って帰る夕ぐれ
野菜からにじむ苦味をおいしいと感じるほどに歳を重ねて
どこでもマスクが買える「当たり前」戻してくれた誰かを思う

ある夜

千仗千紘

欲しかった一往復のおやすみを味をなくしたガムにたとえる
不完全な充電ケーブル 検索を ゆるしの意味をゆるしの意味を
これだからスマートフォンはこれだから部屋も言葉もひからせやがって
目の上へ手を翳さないと眠れない夜はおまえないと思った
目を閉じた中で動いている部屋がおれよりずっと働き者だ
常習犯 既読のままでスルーして額へ落ちて覚まされていく
眠れずに未明をひらき目をひらく「いまだあけず」の曇りのなさに
これだからひかりやがってこれだからおまえがよこす通知がきれい

手と手

草流

お互いに手を動かして会話する初めて伝える私の名前
じっと見る私が動かす手と口を初めて会った友だちだから
「こんにちは」これでいいの不安気に手を動かして挨拶をする
手と手をね動かしたなら歌だつて歌えるんだよと囁くの友は
ステージでみんなが歌うSNAPの歌手を動かして口動かし
友は言う恥ずかしがらず大胆に下手でもいいよきつと伝わる
そのうちに手話を忘れるかも知れぬそれでも私らずつと友だち
久しぶり会う友と手話おどおどとも大きく口を動かしている

湛ふる露

蒼音

月あかりなべて眩しく輪郭がわからぬやうにこの手に抱きつ
てのひらが乳房覆ひてゆびさきは我を離るる生きものとなり
舌先が唇の淵へと触れにしにあまねきこ糸をきみはうしなふ
舌と舌の絡みあひたる泥濘にもはや見えざる理性のあるや
おたがひの胸とむねとが擦れあひふたりの汗が肌に混じりぬ
幾重にも重なる襷を貫きて滾るおもひは溢れてしまふ
しののめになづきの重み確かめむ鳥の影さへ届かぬ部屋で
雪椿ぽつりと落ちてあさかげは湛ふる露を照らしてをりぬ

クランク・アップまで

たえなかず

どのように生きればいいか 占いのとおりもしくは脚本ほんのとおりに
朝井リョウの名を挙げてきみが振り向いて僕を見つめるまで風、薫れ
キュー出しの部長のシャツの白、恋の台詞の間合い夏のうつろい
胸のなかに冥王星があるんだね 独白のときはついて出てくる
ヒロインのきみを裸眼で見ればただリップグロスの強いかがやき
着々と終わる青春 僕たちは部室の窓から蒼い叫びを
声だけで分かる夕闇 バカ、今は英語で言うなよそんな台詞を
シナリオに沿うよう進む振られる日この夏一番強く祈った日

復活祭

多香子

さよならと白いこぶしの花が散るふたり出会った教会の庭
山折りと谷折り何度もくりかえしあなたに飛ばす春の折り鶴
赤い実を食べてもふたりそむきあう言葉持たない鳥よりも寒く
ひっそりと月の桂の芽は伸びてさみしい兎の耳をなでゆく
ひとり飲むワインのロゼの薔薇色の夜の寂しさいやましてゆく
思い出はミント色してうずくまり忘れないでの声だけとなる
復活の願いに卵の色を塗るカーテンの向こうは春の雨降る
鳥になりまた猫になり春の日を過ぎていききたい明日は来るよ

かばん

たかはしりおこ

蛍光灯、チカチカうるさいから消して。 その足首にミサंगाを見る
指先で氷が水になっていくようにあなたが笑うと熱い
コンタクトレンズ外せば輪郭のぼやけたわたしだけ生き残る
Tシャツにひかる二の腕帆を揚げてきみはこの町からいなくなる
どこまでも行ける荷物を詰めるにはわたしのかばんはだいたいさい
ほどかれた髪結いなおす指先に残る火照りも次第にさめて
常識のない人になりきみという本ためらわず破いてみたい
神様は信じないけどきみと見る青く塗られた海が綺麗だ

命の萌し

瀧口美和

薄青き空に抱かれているようなカーディガンから春の手触り
膝下で挨拶してるスカートと名前も知らぬ路肩の花が
ふと香る風が孕んだ新しい命の萌し東へ向かう
清き明き心を込めて投げ返す迷子になった野球ボールを
ブランコの鎖が少しあたたかいゆづつてくれたあの子のぬくみ
自我芽生え根を張る前に駆けてゆけ子らよ薄青き空に抱かれて
帰り道まだ明るいね明るいなんでもできる気がしてくるね
凜とした大気に伸ばす両腕の蕾今日からほころんでいく

秘密のおはなしアワード

竹林ミ來

この星の副音声聞きたくて月をくるくる裏向きにする
切り分ける前の記憶がちよつとだけあると語った苺のケーキ
教科書のザビエルたちの間では落書きされてないやつはザコ
かゆいところはないですか はい でも少し 恥ずかしい過去は少しある
四色に分かれたピザの境界を通過するのに賄賂を渡す
持ち主のところに戻りたくない泣き声のする落とし物箱
セキュリティ面からすれば黒鍵に住みたいですとピアノに頼む
ロックダウンしていますから外出はしないでください鬼もだめです

ジャムおじさん暗殺指令

田中翠香

ゴルゴへとばいきんまんは依頼する「指定口座に振り込みました」
「わかった。やつてみよう」ゴルゴはそつと言いつち葉巻を捨てる夜の立川
ズギューーーーーーン……ジャムおじさんは口を開け天をにらんで地へと崩れる
「許さないっ……」アンパンマンは劇画風の顔へと変わり誓う復讐
アンパンマン号にロケットエンジン積みしバタコも復讐の鬼
絶対に放送できぬ罵倒語を放ちチーズは扉蹴破る
懸命に命乞いするばいきんまんをせせら笑いしアンパンマンは
そのすべて見届けていたドキンちゃん報復の連鎖ここに始まる

ひととせ

田邊葉月

静寂のダンス0時を回っても終わらないあなたが眠るまで
ああ今日も誰も死なずに終われそう微かに上下する羽布団
もし仮にポケモンマスターだったなら「うたう」で寝かしつけ余裕だなあ
祖父祖母に抱かれず育つ乳飲み子の健やかなれと飾る人形
頭隠さずおしり隠さずそこにいる完全にいる迫真の「ばあ！」
タオルから逃げた野生のアカチャンは寝室方面へ向かった模様
我うたう赤ちゃん眠る我こそが「うたう」覚えしポケモンである
しあわせがついに歩いて一歩ずつ転けながら一歩ずつ近づく

社会星人

田斗かき

髭を剃り過ぎたとわかる傷口に赤い手指でようやく気づく
いやこれは善行だとは思わないが点字ブロックの雪を蹴りゆく
この道に花屋はあったかずいぶんと登校下校をしていないから
愛嬌も在庫があるのイヤホンで眉間のシワを目元へ移す
「おれはない」「わたし」も「ボク」も違うな、と一先ず羽織った「自分」のパーカー
無が滑る最終電車の車窓など、俯瞰して見れば映る酔っぱらい
舌に残る冷めたブラックコーヒーを置き去るように飲むミルクセーキ
粘土製の顔ならいいな困ったら少しひねって花を活けよう

春を失う

千束

拾っても拾ってもまだこぼれだす四月の砂の金色鈍く
雪解けを呑み込み走る川面に似て開き続ける夜の瞳孔
白き袖指先かくと通り抜けあなたの湖の温度も知らず
聴診器首からさげて上を向き利口な狩猟犬の顔をして
まだ硬きアボカドくらくまんなかに大きすぎる種抱いて眠れよ
君のなかにも海は広がりしんと砂浜軋む裸足の爪先
教室はさざなみめいてすれ違うひとりひとりの砂漠ひろびろ
恥じらいもなく花芯見せ霧雨に春を失いゆくチューリップ

一生分の海

茅野

「あおい」って言うと「碧い」と言う君と少し違った青を見ている
「地平線みたい」と言うと「海だから水平線」と訂正される
右後部座席のドアが開かないクリーム色の君の中古車
どこへでも行けると思う一眼レフカメラで空を切り取る君は
また靴に砂が入ったふりをして時間を止めてしまいたかった
靴紐を結ぶ間も本当は振り返らずに進んでほしい
君と見た一生分の海をいま雲の速さで消化している
前に行く君の視線は不確かな爪先で確かな光になった

ささくれ

千原こはぎ

たぶん夜のせい あなたが引き出してしま uwatashi のパンドラの箱
ありとあらゆる手を試みる深夜二時 自分の機嫌は自分で直す
いいの氣にしないで平氣大丈夫 何の効果もない壁を置く
完璧なあなたのせいでささくれの多いわたしはまたささくれる
ひらいてはいけない箱のいくつかを仕舞い込む胃の奥の混沌
他人には見せない弱さ汚さの包みを解きたがる熱い声
拗らせた劣等感を吐き出せばいつものようにあまやかすひと
まるで手のひらに撫でられているみたいあなたの声の海に眠れば

春の雨

月岡烏情

人が死ぬときの瞳の色をして月がすべての夜を見てゐる
きのふはじめて遭った男が耳元でふるさとの海の音を囁く
ひとびとがまた一斉に虹を指す黒く引き絞られた傘にて
水中花そして少年、揺れながらともに裡から腐りはじめる
まるで時がこの世界から落ちてくる悲しみの手触りを確かめてゐる
夜のたびに母の懺悔を聞いてきた百合と花瓶の水が腐れる
卵黄が白い便器を汚したらいつまでも春に終はりが来ない
春の雨の記憶のふちに寄りかかり眠る あなたを舟と信じて

舌を這わせる

chari

交差路に止まれる標識ばかりあり立ち尽くせ立ち尽くせ 夕焼け
淋しさが死因でしょうか手のひらに横たう割れたスマートフォンの
手の平じゃ掬えないって分かってた水面の月を見つめる君を
冬陽射しカップ擦りぬけストローを光と影のふたつに割りぬ
「悪口を言われていたよ」囁いた友の舌先かるく弾んで
Modal Jazz 散らばるスタバにてマグの白き人魚に舌を這わせる
あの夜に君の眼鏡を外せたら跳べただろうか異なる今日へ
咳ひとつ僕から離れ雪となり君の寝息に解かれていく

涙がキラリ（前編）

月丘ナイル

〈キラリ☆女性医師！〉朗らかにやわらかに差別を乗せてメルマガが来る
殊更に採りあげられてわたしたち女医という種の行動展示
口角まできちんと乗せた口紅がサージカルマスクに剥がされてゆく
男性の医師に合わせて作られた診察台がわたしに高い
直しても治しても減るパンプスのかかと気づけば傾いていて
適齢期、桜前線、見切り品ばかりが並ぶスーパーの棚
男なら外科医になったかかったのときみに語りき 酒の肴に
知らぬ間に花を落として鮮やかなソメイヨシノの萼の紅色

百鬼夜行

月硝子

物の怪の居場所もあった街灯のまだない頃の蒼い暮れ六つ
芝居小屋探す乙女を送りつつネタばらしする送り狼
ヒトと魔の境おぼろな頃は皆麻の衣と説く国夫翁
昭和との結界に置き去りのままずっと黒電話が鳴りっぱなし
終電ののっぺらぼうが多すぎて過去の自分が見分けられない
付喪神例えば菓飲み過ぎて罇の入った硝子瓶われ
一人居てヒトのかたちを思い出す為の「北斎漫画」の手ずれ
百鬼夜行絵巻を不意に終わらせる全てが溶けたまっ白な朝

夕焼け色の

道券はな

感情が結露していくあなたからだよう雨の匂いを嗅いで
前髪をふるわせるのは東山魁夷の森に吹くような風
言いさした言葉の次を待っている余熱で黄身をかためるように
早春の鮮魚売り場で空を掻く大車海老のおおじろいあし
雨粒の影があなたに降りかかる窓際で頬杖をつく手に
雨の夜の鍋に静かに煮えていく海のいのちと陸のいのちと
親指の爪ほど残るコチュジャンを排水口に逃がしてやった
雪残る故郷のことを言いながら夕焼け色の酒を飲むひと

星の眷属

堂那灼風

そのあとのことは誰にも知られずに人類消失点へ至って
血の通う肉を持たないこの風はもっともふるい星の眷属
墨色に冷えた溶岩流びしり、ぴしりと紫電 刹那の輪廻
年ごとの贅を飲み込み河はゆく適わぬヌーを渡らせながら
風まとう熱砂はナイルを撫でつづけ王の墳墓が土と化しても
サバンナに野火の広がるオレンジの夜があるいは地獄のはしり
立つことをやめた淡水生のゾウ波紋の円心より鼻を出す
秘境から突き抜けて立つ秘境へと テーブルマウンテンを登れば

どっくん

遠山文

牛乳を飲み干しコップに残る膜のように白い無罪が欲しい
縞々の大きなパンツ洗ってる鬼の半けつ撫でる潮風
＼＼に座って海のシーンごとラップ音たて泣いているひと
贗物が蔓延る街を抜け出した茂みで見つけたらいおんハート
ケンタッキーフライドチキンの匂いする負けそうになる負けそうなまま降りる
可燃性少女を頂く店先で優しい君は取り上げる すぐ
氷上のブラの容器にどっくんとお買い得なる鮫の心臓
ほらここで小豆を煮ようよ甘くって熱い地獄と一緒に見ようよ

くろわさん、委員長になる

ともえ夕夏

生徒会室は四階 窓からは祖母の家まで見えると知った
長と名のつくものに初めてなって前後左右がすべてあたらし
何回も差し戻される計画書に消しゴムの跡の薄汚さ
できなくて泣く本当は慰めてほしいと知って恥ずかしくて泣く
重責がつらくてみんな一回は泣くもんだって母は笑った
おなじだけ生きたはず生徒会長の制服の袖口摩擦れている
あの子たち平気な顔で先生の理不尽と闘っててすごい
ヨルシカを口ずさむ図書委員長と帰る ねえねえあんたも泣いた？

逆さに置いて

中村成志

パスワード忘れるばかりこの指がはぐれるような冷たい風に
けんけんば 腿へとかかる体重に笑みつつ道の落書きを跳ぶ
赤土のずるずる滑る土手を降り土器と磁器との違いを思う
あああおときやべつまるごとまな板へ置けばどうしてくれよう夕陽
カーテンが本日最後の陽光を吸い込み終えて膝のさむさよ
切っ先を無くした針が血管へ降り積もってゆくような震えだ
銀鮭の紅の脂が滲みゆくクリームシチューまだゆくな冬
ひと部屋で世界が余るときもあるスノードームを逆さに置いて

せんばい、

夏本橙

先輩は（何回目かのこの感情とか）いろいろと教えてくれる
1枚の資料をふたりで覗きこみ隅から隅まで読んでいる、ふり
活発な意見交換とか無意味だったひとりの声を聞きたい
ひとつひとつ消えてくタスク 毎日のようにつもっていくこの想い
遅くまでお疲れさまとなでられてわたし当分髪を切れない
名字より名前にちゃんがほしくっていつかはちゃんを捨ててほしくて
ごめんなさい嘘つきました本当は「すてきです」には「て」がいりません
後輩じゃなくなるためにひとまずは仕事をしなきゃ後輩でいなきゃ

栗ものがたり

にう

雨音が響く本屋の店内で脳内ドラマのヒロインとなる
この世界たったひとつの物語うむ苦しみをこえた喜び
ざあざあと止まない雨の帰り道はお気に入りのレインブーツで
空見上げ虹を見つけた瞬間の瞳はきつと七色だろう
いつもより早く起きた朝くらいフレンチトースト焼いてやろうか
職場にて星の数ほど余剰した菓を二枚そつと手に取る
幸せを引き出すための切符だと本のページに菓を挟む
願い事叶えて消える星よりもただ空にある星でありたい

LONG TIME NO SEE

西淳子

青春を濃縮還元したようなプレイリストを爆音で聴く
ジーンって遺伝子のほうだったのね。feel my soulの意識じゃないのね
好きだった娘の待ち受けがCHERRYの歌詞画でメル画でした。それだけ。
Rolling starをBGMにして眺めています、ピタゴラ装置
イヤフォンの片方だけが流している Good-bye days 右の断線
GLORIAはいつか聴いた曲 ああそうだよ 進研ゼミで聴いたところだ
ぼくの心^{あか}があなたの声^{あか}にさらわれる SUMMER SONGでしっかり溺れる
懐かしい痛み、87hanage いたい^{あか}のいたい^{あか}のとんでかないで

ビスケット・ソング

西村曜

死なないで生きるすべなくポーションのミルクをすべて向日葵にやる
いま僕が精緻に生きていることも神のビスケットの食べこぼし
ポケットをたたけば割れるビスケットその痛みにはもう慣れました
とこしえ、とだれかが口にするたびに向かいのジョンが吠えるシステム
手をうつてむすんでひらいて無駄だつてあなたがやめたおこないを見せて
感傷の傷とはきつと擦過傷うすいガーゼをあてて癒せる
手みやげにケーキを買って帰るとき信号ぜんぶ青だったんだ
ポケットを裏返したらビスケットのかすが出てきて、おやすみなさい

ぼくは才能がない

ネコノカナエ

いろいろと才能がない卒検は二回落ちたしバス酔いするし
いろいろと実力がない自動車に乗れないゴールド免許で図書館
いろいろと遊びに行きたい走りたい自転車で行く虫がぶつかる
いろいろと虫がぶつかる目に入る涙でにじむ縁石にぶつかる
いろいろと才能がない前かごも今日は空っぽ あ、いや今日もか
いろいろとかごが空っぽかぶとむしはなびらはっぽとびこんでくる
いろいろと渋滞している自動車を百台追い抜く（それは盛りすぎ）
いろいろと細かいことが気になってこれは追い抜き越しじゃない

今はもうない

野添まゆ子

君の背へかける言葉の見つからず手だけを振った私を悔やむ
少しだけ低めの声が好きでした もう呼ばれない名を書いてみる
限界へ挑む小指の深爪は赤い糸には頼らぬ決意
理由づけしたい涙のあるときは私のアップデートをやめる
ミッシェンをクリアすると消してゆく写真に真夏だけが足りない
口紅を変えない訳が欲しいから「なりた顔」へ投票に行く
もう消せぬ記念日の文字フリクションなら良かったと今さら思う
がんこちゃんみたいなピンクのマニキュアを買ったセリアは今はずい

Pray

箱囲亮太

手に滲む明日の無力と無気力としまいそびれたささくれた指
隠された口の裏側に飼うなにか食べていないのにしよっぱい感じ
苦しmitと名前はつくが遠くて吐く息はどこへ？集まっていく
あいつとそいつとあの人と会った。そして会ったことのない誰かが
寒さとは風につきまとうものでもなくて し そびれちゃったこともかなしき
君がため残された歌につきまとう紫煙公園には常夜灯
黄昏が溢れだしてくる今にも余裕の先に行つたと祈る
雨が降る予報はハズレ火をつけるもう使えそうもないライターで

境界

濱松哲朗

アスファルト濡れてゐるから降つたのが分かる 他人であれば尚更
初陣にて死にたる武士のごときもの斜めに傘を持ちて歩めり
東京を囲へる雲は指先でぎつと汚したやうに明るむ
散らかつた駅のまはりのコンビニは色で見分けて立ち寄るところ
水とみづ触れ合ふところ、満ち潮の予兆のごとく鳥の影たつ
切り取つてしまへるやうに初めからミシン目のある人になりたい
うつむきをうなづきとして返すときあなたは森の境界にゐる
クリームを靴に塗る時みづからを火種のごとくかかへ込みたり

季節の色（うたの日二月・二月まとめ）

薄荷。

沈みゆく陽の暖かさじわじわとチョコレート色に染まる歩道橋
星空と同じ色したマフラーにあなたの喉が守られている
真っ白なニットコートの隙間からどうしようもなく漏れ出るひかり
ネイビーの宇宙模様のスカートで街を歩けば夜がはじまる
真っ青に雪の公園染めあげてガラスのように月は冷たい
オムレツのほっくり焼けた白い湯気満ちて我が家に朝の訪れ
さみどりの四角く切られたレタスまでドレッシングが届いていない
ピンクページジュのトレンチコートひるがえる春のたよりは五分遅れで

B館一階生活指導室

春陽

窓際のトレイの中にねじ切れた鍵とチェーンの墓場はあった
夏服に綿のベストの模範的生徒のようなマネキンの群れ
水をやるタイプの人がいはいまま四、五年前から枯れてる植木
体育館の二階の窓が砕け散り破片は今日の雨粒のよう
聞き取り中、校舎の端の指導室は椅子の軋みがやけに響いた
少女らの依存関係の終わりを静かに看取る火曜日の午後
平成十八年あたりの朝日新聞の社説と原稿用紙
何人も卒業させて誰のものにもならなかった貸し出しの靴

Sampling

人々ひとり

頂に昇る太陽夜勤者の朝にこだまする目覚ましの音
荒鷺が羽ばたくようにまばたきが新しい街を見せる雨あがり
駆け抜ける奥の細道うちのカレーブロック分遠くに香る
ありふれた兄弟喧嘩のその末に電気椅子神が涙流す
銀箱に紙切れ入れた金太郎そっか国家は僕だったんだ
とこしえに背負う重荷は寄越しなと赤い横縞のオニヤンマ飛ぶ
目白啼くまたつつがなく冬は去る靴を履き替え走る春風
慎重に間違えないよう繰り返す君に雷落とすまじない

ゆめうつつ

平井まどか

きみが指折り数えてるその指の果ての日付で待ちたかったよ
この漢字じゃないイメージだったって名前を呼ばれたのが初恋
誰とでも仲良くなれるタイプとは仲良くなれないタイプのわたし
方言の抜けたあなたがそのことに気づかず話す今の生活
「今もまだ出来るかな」って逆上がりして逆さまになった校庭
コードからコードへ移りゆく指に選ばれない場所の弦が鳴く
声を見て形を聴いて目を嗅いで心を食べていたらもう朝
まだここにあなたが居ると仮定して2杯分淹れてもいいですか

蟻みたい

藤田美香

町内の掲示板に「献血のお願い」が貼られ有休を取る
待つあいだコーヒー牛乳渡されてカロリーメイトも食べさせられて
お名前を言ってください 誰だっけ今わたし誰の役なんだっけ
右手から献血しますねいいですか／いいですよって両手を差し出す
墓場まで持っていきたいことがあり兎にも角にも血は赤いのだ
献血のお礼にもらった歯磨き粉とサランラップが少しはずかしい
蟻みたい ざわざわ並んで買う人らビジュアル重視のいちご大福
自転車でゆっくり遠回りして帰る虹ひとつない空を見上げる

雨が、やみますように

藤森岬

すぎだつて伝えられずにさくら散り雨ばかり降る春のまぶたに
のど飴とマスクは手切れ金ですか振り返らない雨のたそがれ
降りやまぬ雨に名前をつけたくてぼそぼそ声で呟いた夜
雨音に似てる名前のくすりだよ眠れぬ夜に飲んでごらんよ
眠れずに爪先だけで足元のちいさき猫のぬくもり探る
雨音と混じりあつて猫の息でのひらつたうおやすみ、さあ
ぎんいろは明け方に降る雨の色ひかり射す日をただ待ちわびる
欲しいのは泣いている子の手に乗せる栴檀色したちいさなひかり

常磐炭鉱廃墟訪問記

笛地静恵

ぬばたまの口開くまま廃坑のトンネルは呼ぶ夜の名前を
日常は鉄塔の下整然と群がりて住む黒き住宅
とうちゃんが今日も夜から帰るよう神棚祈るかあちゃんの昼
高く低くサイレンは吠え先生の白墨を置く黒板の緑
急いで家に帰るよう校長は選ばれた子の名前を呼びぬ
落盤の事故のあしたもトロッコは別の穴へとひたすら下る
ボタ山はかつての威容そのままにただ肅々と這い上る蔓
人々の日々の暮らしを静かにも常磐炭鉱廃墟の夕日

春にはハッピーエンドで

福山桃歌

あたらしい季節はめぐり終わりなら何度も越えてきたよぼくらは
大声で名前を呼んできみにしか出せない音で訛りをなぞって
少しずつしか進まないすごろくでゆっくりハッピーエンドを目指す
輪郭がぼんやりと春 桃色のアウトラインが似合う笑顔だ
きみの角生え変わらないでねちよつと歪んでるのがいとおしいから
波になってさらってほしい足元を優しく撫でるざらざらの嘘
ありえないことばかりある泣いているきみの右手に知らない傷痕
はみ出した色がきれいでどうしたらぼくらは分かり合えるのだろう

引き出しの手紙

ふうみうり

新月の歌集の頁が冷たくて水の中へと入っていくよう
ストーブがゴーゴー鳴いて騒いでわたし右頬明るくさせて
開けることためらっていた引き出しの中で便箋息づいていた
手紙にも締め切りがある投函は明日を過ぎれば葉っぱに戻る
途切れない駅のホームのアナウンス行き先がある人々に降る
カフェにいて雑音ずつと聞いている誰でもないが居心地よくて
人々がそれぞれ違う目的で渡る信号わたしも渡る
北風は出さずじまいの封筒を生み出し昨日へ逃げていった

コートを手洗い

古井久茂

レトルトのカレーを買って来ないなら明日の夜は雨が降ります
シェアしよう 部屋もコートも夕飯もハンドオイルも記憶もすべて
乗り換えのたびに脱いだりまた着たりしたくないから汗は許そう
側面が錆びてデコボコ燻製器 風で倒れて前もデコボコ
食堂の換気扇から出る湯気を浴びる桜は咲いたでしょうか
足元にすり寄る猫を避けたのに裾に残った灰色の毛
優しさはすべて捨てたという人に少し汗ばむ体温があり
少しだけ迷った末にストーブを片付けた日はやっぱり冷える

愛してない

まきぞの

売り切れの光に小銭を入れたあと気づいてこれは失恋でした
仕方なく買ったココアに手袋をなくした指を温められる
てぶくろを手袋と書きたやすさで恋人同士と名乗っていたね
かなしいのではなくつらいのでもなくただ揚げ物を作らなくなる
いつもなら電話がかかってくる頃でくる頃だけ電話はこない
鼻歌が引き算されたこの部屋は秒針音がやけにうるさい
何もかも残さず家を出たきみの苺のジャムがずっと冷えている
間に合うと思った わたしだってまだあなたのことを愛していない

さんぱりんぐ

まこ

One for the money, Two for the show. ぶかぶかの王冠を脱ぐ夜のイメージ
これは毒殺 発芽とともに体内を侵されていくきみの告白
晴れたから、が口癖だったワンピース まだ美味しくはない缶ビール
ビニールの夜に揺られて躓けばきみとの fuck も恋愛のパロディ
その嘘は煙草の先の火のようで苦いひかりで、バカばっかだ全く
永遠なんて丁寧に言えば 底辺に垂直二等分線の朝
恒星の個性がひかりだ 後世の僕らに晩夏の叫びはとどく
きみの手に触れないでいた日のような、燃やす金より高い花束

今日は負けない

まさけ

執拗な光の波状攻撃を耐えて這い出す綿毛の世界
晴天にグレーのスーツで駆け込んで曇の仲間になる練馬駅
お土産の饅頭みたいな車内にて吐くため息は黒館の色
灰色の波間に見えた白セーラー赤いリボンが軽やかに舞う
あの頃と同じ歩幅のはずだから試す歩みはマーチのリズム
いつもより背筋を伸ばし自販機の一番上のコーヒーを買う
デスクにて口に含んだコーヒーはいつもと違う華やかな味
昇りゆく日を一瞥し読むレジュメ脇に記した「今日は負けない」

眼差し

真島朱火

ばあちゃんがパヴァロッティをかけるたびアパートに吹くイタリアの風
飛行機に乗るはずだった 体操も泳ぎもできる祖父の白い歯
何もかも白く染まった病室に大好きだったガーベラを挿す
上書きをしてはいけない思い出があるから今も買えないサイダー
旅先の家族を写すスナップのどれもに宿る祖父の眼差し
制服を着てゐるわたしを知らないで死んじゃうなんて若すぎたよね
合格の報告なんかしなくても全部分かっているような風
なんとなくうまくいく日は人知れず祖父が空から降りてきている

春空

松本ユミ

先生！先生！追う背のあるうれしさよ桃ほるほるとほころんで春
カーテンの向こうに揺れる五限目の空どこまでもどこまでも遠い
今日もこないあの子の机にどっちゃりとバレー部の重いセカンドバッグ
練り消しをこね回している50分チャイムが鳴る前に片付ける
同好会と名付けるなにか だらだらと意味なく集うことが愛しい
バッテリーとシベリアをたぶん間違えてしまっているが続ける会話
実際に頭は重い首と手と両方使って持ち上げる脳
目を瞑る人から午後に溶けていく教科書の中でたどる音程

もーにんもーにん

御糸さち

カーテンをカラッと開けて今日もまたきみを迎えにくよ、もーにん
ねえもーにんこっちを向いてさっきまで見ていた夢の話をしよう
何度でも朝はうれしいあいいうえおレタスをちぎる音のきらきら
目玉焼きつくるう目玉がつぶれたらスクランブルエッグのはじまりだ
月・火・水・炭・水・化・物 時としてざらりと焦げてしまうつースト
インスタント☆コーン☆ポタージュ☆スプーンがくるくる描き出す魔法陣
食卓に白いお皿は冴え渡りもーにんもーにん僕の朝だよ
ほんとうはいますぐにでもおふとんにもどってすべてわすれてねたい

Re:born

三浦くもり

何もかも生まれ変わりの可能性涙をそっと包むハンカチ
図書館を司書に直され現実を前提にした夢が貼られる
挨拶のない国に来て柔らかな名前前の人の多くいること
シナシナ派ですと答える路地裏のポテトに夢を与えるために
そのチャイがあなただったと気付く時無音で崩れゆく喫茶店
心地いい孤独に浸る星空を見上げたいのは故郷だから
水曜はよく雨が降る水曜はあなただろうかも泣かないで
概念として生まれてもコンビニでアイスを選ぶ君に恋する

君とのくらし

三浦なつ

砂浜を裸足になってゆくときのようにはじめの君とのくらし
「ルッコラ」とあなたが言えばテーブルにひと足早く春の風のふく
この部屋で愛はときどき揺らぐけど電波時計はいつでも確か
拭っても拭ってもすぐ降り積もる埃あなたの嘘がすきです
自販機にコインの落ちる音のして取り戻せないもののあること
早朝のシンクの中で割れている皿の静かに告げる絶望
大人だしてもう戻せないものもあるサクマドロップスの薄荷味とか
もうジャムの記憶をなくして空き瓶はやさしくひかりを受け入れている

真っ白な空

みがかそま

(やさしさ)がナイフになると知ったから僕は立ち去る光のない眼
エーミールは破れた蝶を貼り戻すポケットの中はスマホが一つ
「この作品はご視聴できません」すでにもう五十音順のロックンロール
笑う時口とマスクの間にはわずかに隙間ができて憂鬱
問題1あなたの性格なんですか円周率は4だとします
影文字のフォントは静かに整列しあなたの光はどこからくるの
カーテンは窓から世界に吸い込まれ風は断片的に目に写る
真っ白な空を舞う鳥の群泳に目をやるように生きていること

一点の濁りもなき

深影コトハ

こんなにもまとわりつくのにさよならは清音またいつかねも清音
太腿のほくろに触れるいつの日も若さをうまく使えなかった
燃やされた制服 記憶にある闇は正体もなく美しかった
遠泳の果てにあなたはイカロスのエクスタシーを語ってしまう
幸せに眠るお腹に初雪のように積もってゆくロキソニン
こめかみにキスをくれたねいつか撃つための印のようにあなたは
笛ラムネ 吸っても吐いても音は鳴り私は寂しい大人になった
一点の曇りなき日に放たれてしまったひかりとして生きてゆく

新しきブルー

六厭めれう

また雪に埋もれてしまうブルドーザそれを救いにブルドーザ行く
水色のマスクは少し嬉しくて色の濃いほう表につける
紺碧の中に碧をみるとときも碧はなおもアオと呼ばれる
乗客が降りてくるとき前駅と前々駅の匂いからまる
この景色どうぞご覧と言うように遮光幕などない窓ガラス
青ペンのインクが切れるそのたびに軸とグリップ、バネも棄ててる
街中がアクリル板で覆われて怪しいものの影に気づける
雑踏はいたく寂しい一人なら鼻歌なども歌えるものを

西日がさしているあいだけ

八重森かもめ

キャラメルがゆっくり溶けていく内にあなたの声を忘れてしまう
糸状の雲を辿ればなんかいい感じの空に届くだろうか
自転する地球のせいだいつまでもサランラップを上手く切れない
夕方の部屋でホッキョクグマが乗る水がゆるりゆるり溶けてく
ストーブが暖まらない曖昧な温度のままでラーメンを食う
今日は陽がちゃんと出ていた日記にはすんごく優しい句読点を、置く
生きているわたしはわたしのことが好き西日がさしているあいだけ
コーヒーに沈むシュガーよ天国でポーシヨンミルクとお幸せに。

感謝のこころ

宮嶋いつく

感謝ということばをいつも口にする彼女のくちびるのまばゆさよ
感謝とは意識しないとできなくてアダムとイヴの子孫であれば
足ることを知ることそれが満足で資本主義では否定されてる
ありふれた日々をしばらく振り返る朝日を浴びて冴えた気持ちを
今日もまたストレスとの戦いだったけどフオールを取られなかった
劇的なことがなくてもよかったを探せばそのぶん寝心地が良く
Thanksは「ありがたい」って言うんだな当たり前じゃあないって素敵

地下一階管理室

虫武一俊

七十二歳大ベテランが勇退しその後任として駆け回る
大企業の末端会社になんか支給のベルトたぶん三〇〇円
都心回帰ってこれかよ真夜中に立ちションされているオフィスビル
段ボール、箱のかたちを持ったまま捨てられていて子猫はいない
気にかけてつつかも悪路に行くことのどうしても余裕なんてなくなる
底の底らしさが深くなる冬よ吐息をかけた爪は明るい
地下鉄の音がかすかに聞こえる中央管理室の午後九時
ほんとうにオフィスグリコが職場にも家にもなくて助かっている

春がいつぱい

山上秋恵

ひとりずつガラスケースに入れられてかなしい街を見守っている
手の指を蜜柑の香りに染めることしかできなくて東の間の雪
かなしみをあえて拾ってゆくような人生もあり たえば吾も
泣く吾をなぐさめるのは虹ばかりまるくかなしくひかっているよ
本当の気持ちは横へ置いておきこんにちはとだけ君に告げたい
君の立つ春のまんなかあたりにはソメイヨシノが真っ先に咲く
五十年前の少女に逢えるかも紙石鹼で手を洗ったら
亡き友の足跡いつか芽吹きだし菜の花色の春でいっぱい

四つの季

山川仁帆

足を踏み入れたら二度と戻れない森はこの地の晩秋に在る
秋深く火の手はあがりそのなかを歩むひとつの背を見ていつ
音もなく壊れしドライフラワーを拾いあつめる白き息の夜
銀色の蛇口こぼるる一滴はどこを旅してきたのだろうか
四つの季を名付けしひとよ 時間を経て わたしも青き波音を聴く
この春、と云うとき風は展かれて胸をわたりぬ山谷めぐりぬ
葉洩れ日は膚の上にひかりから生れしレースの模様のごとく
どこまでを夏と呼ぶのか サンダルと取り残された約束ひとつ

黙食

山下桂子

マスクの中の息は誰にも触れなくて人類はもう滅びてしまう
冬の朝に窓から見える街路樹のひと葉ひと葉に名前をつける
手を洗うなんども洗えば指先は切れて痛むがそれでも洗う
時短営業の店は閉まってしまいうからあなたと過ごす夜のみじかさ
(なんのため) テイクアウトを選択し横に並んで咀嚼している
マスク越しに口づけをする陳腐さを許してあげる春がくるまで
口笛を鳴らすあなたの唇を最後に見たのは夏だったか
大安に宝くじを買うようなふたりになろう はるなつあきふゆ

黎明

結川澄衣

人生は螺旋となつて巡りゆきやがて海へと届くのだろう
夜を越え幾度も電話をしたけれど壁紙の色さえも知らない
鋭くて甘い言葉が欲しいから金平糖を口にした夜
新しくピンクブラウン染めてみた一足先に春になるきみ
爪1つ1つを筆で丁寧塗って名前を付けていく朝
人生は揺蕩う船のようだけど、どこへ行くのかカモメが鳴いた
道端に転がる空き缶ゴミ箱へ夜の亡骸弔うように
夜になり家族がみんな目を閉じた私はメアリー花園探す

家電と生きろ

遊星

冬眠をしたハムスター、チンすると生き返るってリカ言ってたし：
[N]キーが剥げてきたから memo と呼びいつかのようによしく触れる
エアコンのカビが香って夏が来て火薬の匂いを覚えていない
ばあちゃんがテレビと囲碁を打つようにコーデバトルを眼差している
ブレーカー落ちる／正気もオフになる／予備電源に切り替わる／ふたり
掃除機に溜まった君の残骸が過ぎた季節を台無しにする
ポンコツなルンバは愛せて何故彼の欠点ばかり見ていたのか
アイロンの要らないシャツを揃えたら生活の「せ」が黄ばみはじめて

ファスナー

ゆりこ

大学のロゴが掠れたシヤカシヤカを相部屋に干す 匂いはローズ
飛べるかも知れないからと背に風を孕み歩いた図書館の傍
マイメロのペンケースへと詰め込んだ作り笑顔と寂しさの粒
フリースは静電気帯びETと君の指先友達のまま
ユニクロのパーカーで行く紺色が3人かぶって制服めいて
バイトへとピンクメイクで遅刻するあざとかわいいビッグスウェット
噛み合わせぬファスナー無理に押し上げた止め金具飛び流星になる
人間の着ぐるみを着た火星へ帰る手立ては見つからぬまま

「うたそうによせて」

横雲

梅の木に鶯つどいうつくしい歌の数々うたう春くる
棚霞たなびく峰に高行けば楽しい時をたかぶって待つ
外遊びそぞろ歩きは其の日過ぎ素知らぬ顔で添星を指す
ラブラブの裸心晒した楽園にライトを浴びる爛漫の花
にら摘んで卵とじした春の味誘われている甘い香りに
寄り添って深く息する胸の形決意告げると見えた朧夜
せをはやみわれても末と願いつつ吉凶半ばに過ぎた七歳
てはじめに君への思い記してる出合いを祝う短歌に寄せて

陽気

横浜ふみ

前髪に埋もれた綿毛を逃してあなたの野原に訪れる春
穴の空いた靴下ばかり持っていて爪もそこだけよく伸びていた
気まぐれな花は枯れても捨てれずに五月の雨に風邪ひかされる
うたうことやめたあのひと会社員ひつつかいのように早起き
陽が当たる布団の中に隠れてるビィナスになるサナギのふりして
いつも必死なのであなたの穏やかで要領の良い八重歯が怖い
モネの池で浮かぶ枯れ葉 風が無いときの言葉をググってしまう
飛蚊症というらしいが私にはたましい見えたものだけ信じる

スタンダードナンバー

龍翔

リビングに霧立ち込めて愛といふ見えないものを見つめてをりぬ
ひそやかな音を立てたいわたしたち枯葉のやうに重なり合つて
おいしい、と子どものやうにはほゑんできみはわたしの水を飲み干す
ねえ、月に連れていつてよ わたしから言はなくなつて好きと言つてよ
バスタブに浮かびてゐたる星屑をつまみて流す つまみて流す
おめでたう この素晴らしき世界ではあなたは舌を抜かれずに済む
愛猫は冷めた紅茶に目もくれずていふおとうと寝息を立てる
来るはずのない王子様待ちながらいつかいつかとさきいかを囁む

歌う小鳥へ

ルオ

すべらせたタイムラインに浮上する貴女の歌に止まる指さき
できていく本と企画とつながりとその軸にある歌が好きです
まあ今は会えぬ距離だし多忙だし稀ないいねで許されてたい
さもばつと出来た魔法のような歌その原料はたゆまぬ日々だ
れんかつて打てば恋歌になるのでしょ恋を尊ぶ指の意のまま
かみさまがいるならあげてほしいのはコップ一杯分の優しさ
つかれたときつとあなたは思わないだから労うより歌いたい
おもうのはいつも優雅であるひとで盛況なれと願う九時すぎ

電話越し深夜0時のカラオケを抜けたきみから届く月光
更けてゆく夜はちいさな永遠で薄い毛布の感触のまま
まだ冬の気温の春のさみしさを纏った声で交わすおやすみ
静脈に水色の血が流れてるきみはどこまで幻なんだ
甘やかすように笑ってくれるからひよこの絵文字ばかり使った
おすすめの本も映画も遠すぎるシャツのボタンもたいせつにする
完全な春を迎えて会える日の街灯ぼくがぜんぶ付けるよ
ここからは立ち入り禁止 真っ白なぼくの通路をきみが汚して

馬鹿な人

若枝あうう

やわらかなごめんなさいの音程に潔さとは歌だと思う
樂しげに買い物カゴに足されゆく一晩分の未来の重さ
きみだつてつらいのでしょうか LEXUSに背負われている初心者マーク
山芋がとろろに変わる瞬間のそんな傷つけ方を知りたい
ほぼ久保田利伸でしたししゃっくりを止めようとするきみの動きは
夜のことは分らないのにカフェインが体に染みているのは分かる
あかねさすオン・ザ・眉毛に俺だつて目を逸らさずにいればよかった
満開の桜の下できみだけに馬鹿な人って呼ばれてみたい

さうさう流れ

和田晴美

カボタストとおでんを取りに来るといふ子のする事は全て嬉しい
悲しくはないのに号泣した感じらしいね川はさらさら流れ
身体に不具合はなく眠いだけその理由は知らずに光る石
吐く息を結露させてはサージカルマスクの顎から零れる涙
かおかおと鴉啼き渡るこの朝も地表に寂しい生き物の群れ
水鳥が不意に潜って戻るまで確かめ歩きだす 二月尽
咲き出した時が最も濃い色をしているのだねそれが花だね
しらしらと輝く月に照らされて影と私と自転車は行く

「空」
テーマ詠

てのひらを月の光に透かしたら青く冷たい輝きとおる
夕焼けを拭い切れたら私だけ見られるように筆筈に仕舞う
きみの影、送つてごめん。あまりにも飛行機雲がまつすぐで、つい。
高らかに歌うドレミファインバータ赤い翼で駆ける海空
温もりは陽だまりに似て君は空その微笑みで春に溶けよう
風に乗るグライダー今ひとときはその墜落を飛行と呼ぼう
オレンジと青、紺3色展開で未来じゃ空も売り買いされる
乱気流はポニーテールにしまい込み高度上げてく君との夏は
白っぽい空を眺めて始まりの前の半端な時間に浮かぶ
くやしきはなかった、けれど、青空の青の方へと虹は去りゆく
鳥にのみ許されていた蒼穹あおぞらの開きははじめは女の翼リット
幸せはどこにあるかと空をみていられるだけのほんの幸せ
この空が君に続いていくことを確かめながら今日も旅する
青空をすすむ飛行機雲なぞる君は未来の場所を知ってる
あおむけのヘッドスライディングで負けて空の青さに笑われている
爪痕を残したいのに透き通る蒼しかないし掴む雲だつて
空港にむかうリムジンバス僕は確かにここで生きたかったよ

- ◆ 相河東
- ◆ アオ
- ◆ 青木夕海
- ◆ 青時
- ◆ 青藤木葉
- ◆ 秋山生糸
- ◆ 麻数
- ◆ あさき まほろ
- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 朝野陽々
- ◆ 阿曾辺かぎろい
- ◆ アダムス理恵
- ◆ 阿南周平
- ◆ あばがど
- ◆ 尼崎武
- ◆ 甘宮雨
- ◆ 天野うずめ





ふたりして空の青さをたしかめず次の言葉を探す三月
晴れやかなシエルブルーのワンピース今きみこそが希望の象徴
てのひらを空にさらしてうつとはみなしらほねになるまでの恋
馬鹿みたく今日は青空澄んでいるので神様はいないと思う
星落ちて鼠の群れと人は失せ歌舞伎町未明の空と繋がっている
星ひとつ滅びし夜空に繰り上がる王位継承権というまぼろし
空中に行方不明の綿虫が空の青さに疑問を呈す
美しく見えるのは死期が近いから空は何度もうまれかわるの
フォルダの中の千切れた蒼、青、あお鮮やかなのは色彩ばかり
江北の空はくもれど雪とけの水に今年も翡翠の飛ぶ
母を待ちながらココアを飲む日暮れ 男の蟻が缶にむらがる
夕焼けよ彼の痛みは広角で直視できずに両目を覆う
ぶらんこはひかり団地の空に浮くアウフタクトをつかまえようと
手を伸ばすもつと伸ばして触れるもの 飛行機雲の終わりの部分
一面に青い絵の具をぶちまけたとか思ってる僕の泥酔
外は雨 畳の上で天井をこじ開け届く目に見えぬ青
青空を背景にして飛び立ったテントウムシが指の先から

- ◆ 雨虎俊寛
- ◆ 新棚のい
- ◆ 有村桔梗
- ◆ あるこじ
- ◆ 飯野太陽
- ◆ 五十子尚夏
- ◆ 石川順一
- ◆ 泉 葉子
- ◆ 磯山武士
- ◆ 伊藤すみこ
- ◆ 伊藤佃
- ◆ 魚住蓮奈
- ◆ 渦
- ◆ 碓氷藍生
- ◆ 梅鶏
- ◆ 泳二

からつぽの心で空を見上げてる干した布団の上掛けの上
空に居る気分になれる帰り道車窓に揺れる淡色の雲
ひと息でこの冬空を吸いこめば光るだろうか胸にオリオン
夕暮れをゆふぐれと詠むひとたちのうらやましくて大きゆうぐれ
残された羽で手紙をかいてやる空の匂いはどんなのですか
風船よ向かった空はいつも青いわけじゃないから覚えておいて
夢を見る私みたいね回送車空っぽなのに空っぽなのに
果てのないコロナの冬の雲くろくそれでも空へ投げ上げる旗
深き空に鱗の白く輝くは龍の巻きける稀なる秋かな
コンビニのビニール袋が舞い上がるいつまでそばにいられるだろう
時は溶けひきのぼされる星雲の葉はゆれている森はざわめき
聡明な空の青さを知る人は群青のプレハブ小屋に吾と暮らしてた
空は飛びたいけれど変な虫とかは食べたくないで鳥にはならない
空色のマフラーをして線路沿いをまっすぐにまっすぐにむかうよ
ばんやりときみの頬笑み消えゆきてなお目蓋にはうすいむらさき
傘ささず雪降る空を見上げれば全て許される気がする午前
「リズム感ないよね」っていつてくる君、おそらく空気読めないでしょ？

- ◆ ls
- ◆ oot
- ◆ 江口美由紀
- ◆ 榎本ユミ
- ◆ 衿足
- ◆ えんどうけいこ
- ◆ おうい
- ◆ 大甘
- ◆ 大坪命樹
- ◆ 岡田奈紀佐
- ◆ 岡田濫
- ◆ 岡野伸吾
- ◆ 岡本雄矢
- ◆ 奥山いずみ
- ◆ 小椋杏
- ◆ 小澤ほのか
- ◆ 音無 早矢



流星が空に還ってゆくような遠い飛行機にも願うごと
どしゃ降りの空を見上げてみたくなるビニール傘を買ってよかった
廃駅の名をうつすため青年はカメラを少し空へ向けたり
空色のクレヨンありき母の家暮れに餅持ち元旦御節
涙なら俺が大事にしまうからそらよ代わりに泣いてくれるな
ぼくがいま見ている空の水色はコンタクトレンズの色かもしれない
深呼吸していいやろか湖に乗る冬空に相談してる
空耳をついとつまんで囁けばほんのひととき戻る風向き
日が経てば経つほど消せなくなっていくカメラロールに匿った空
空にしたテトラパックの牛乳を踏み潰すアドレナリンが出る
合成をしたような空見つめては真実ばかり追いかける日々
住みやすい風なんだねと空みあげ だってこんなに綿毛が飛んでる
澄みきった空にふたりで手をつなぎ記念写真に影おくりかな
きみと似たぬくもりがあるハチミツの甘さを残す空のカップに
遠くないうちに滅びる人類が出した答えを知っている青
シヨッピングカートを押してどこまでもきみといきたい空の上まで
空っぽの箱に希望を詰め込んで新たな日々を歩み始めた

- ◆ 音平まど
- ◆ おもち
- ◆ 貝澤駿一
- ◆ @kaizen_nagoya
- ◆ がね
- ◆ カラスノ
- ◆ 涸れ井戸
- ◆ 川原まりも
- ◆ 神奈備夕風
- ◆ 菊池洋勝
- ◆ きさうぎなる
- ◆ 北の
- ◆ 北村美晴
- ◆ 橘高なつめ
- ◆ 木野葛紗
- ◆ 木村 槿
- ◆ 京野パンダ



この空にガソリン撒いた神様は西にマッチを落としただろう
空見上げイエスさまってつぶやいた至らぬボクとひつじぐもたち
太陽は西に沈んだ まだ空に残る黄色い部分見つめる
昇るやろほんなら空の真ん中で次にするんは手え振ることや
潔さ耐え忍ぶこと清らかさ空はいつでも教えてくれる
曇天とビルグレーが同化する東京の空に広がるコロナ
ぼくの歌う聖歌に合わせて続くのだ 白い軍服の兵士の行進
満月より半月が良い 早春の 空は蒼くて 心安らぐ
空ひとつ小さな窓の中にあり消息のない人にも春を
ひさかたの空にばかばかペガサスが陽気を連れて駆けるぽかぽか
わたしたち空に転職できなくて不思議だねって花びらに言う
滑空をしたがるやうに広々とベッドいっぱいあなたの寝相
空色のインナーカラーを靡かせて正直者のやうだあなたは
夜の帳が下りる頃たくしは月を探して眠りを待ってる
自転車で坂道登るこんなにも空は広くて吾は不自由で
集いあい遺稿歌集を読みあえばまず星空に春は訪う
繰り返すシンコペーション分かたれた僕らの空を雲がつなぐよ

- ◆ 去年
- ◆ きょんひめ
- ◆ 工藤吉生
- ◆ 久保哲也
- ◆ 黒あげは。
- ◆ 黒須紗里菜
- ◆ 蛍と水脈
- ◆ こうげつしずり
- ◆ 香村かな
- ◆ 小金森まき
- ◆ 古閑弓子
- ◆ 小泉夜雨
- ◆ 近藤あなた
- ◆ 坂本
- ◆ 酒匂瑞貴
- ◆ さとうはな
- ◆ 佐藤水魚



願わくば目を閉じ浮かぶ大月のありかは砂漠アラジンの壺
奏で合う弦の如きやひこうき雲きみがそらにも響きゆくかも
ゆりのきの黄葉はいつ公園をゆけば降り来る詩情ひとひら
始まりと終わりがなくていつだって半端な僕と溶け合える空
神様が空の上から見ています多神教なら幾千の目が
たまさかに空の凝りしよにあればわれと思ふも波ひとしづき
水溜まりが空を映して揺れている雨よ明日もあたたかく降れ
空は澄み風は聖らか鳥籠のふくろうだけが「はい」と言う夜
ああ空よこらえきれなくなつて雨 一滴二滴そしてどしゃぶり
老犬のあくびを見やるまなざしで父は二月の陽射しを仰ぐ
不安げにブランコを漕ぐ少年は悩みの分だけ空に近づく
でも僕ら、10kmぼつちのはざまから空って呼んで空回りする
街にあるペンキ屋ぜんぶ電話して「空を染めて」と依頼してみる
決断は大胆そして繊細に銃タネそしてごはんで決まる
持っても傘はささない天気雨 空とわたしが繋がる時間
引越して見上げてみても山はない空が広がるすぐに慣れるさ
晴天に雷鳴が散る ついさつき嫌いと言っておいてよかった

- ◆ 沙羅粗伊
- ◆ 汐射ハルカ
- ◆ 紫苑
- ◆ 詩季
- ◆ 鹿ヶ谷街庵
- ◆ シダタクマ
- ◆ 西鎮
- ◆ 雀來豆
- ◆ 章生
- ◆ 城山桜
- ◆ 水面狼
- ◆ 鈴木 精良
- ◆ 鈴木智子
- ◆ 鈴原ゆり
- ◆ 諏訪灯
- ◆ セサミスペースM
- ◆ 千丈千紘

水たまり 濁る空でも虹は虹 踏まずに帰る大人になった
義父の描く大人の塗り絵の空の色青い色あり赤い色あり
赦されし瞳のごとく星みえぬ空の深処に満月は出づ
青空にポップコーンを投げているきみが今年の春の光源
この耳であなたと空もとべるはず象が見ていたないろの夢
縦笛で「故郷の空」を吹いた日のあの場所の空が私のふるさと
革靴をいくつも潰したけれどまだ探してしまう空の飛びかた
締めきりの窓から空を見ただけでなぜだか風があると思った
見上げれば空には空の笑い方楽しいことが僕を選ぶよ
夏空を軽飛行機が飛んでゆくような音してスケボーの人
花の絵をかざる手つきでアリエールかおる洗濯物を空へと
もともとは星座を結ぶ線だった糸を使って話す雲たち
ふうわりと空からやってくる風をつかまえてみる春のはじまり
入道雲の先の世界を見るために冒険に行くからす鳴くまで
プラタナス空をかくして生い茂り春はいつでも唐突に笑む
前向きな言葉ばかりが降りそそぐ求人サイトの晴れわたる空
カボションでつくる星空 眠れないわたしを空っぽにしてほしい

- ◆ 蒼月まりか
- ◆ 草流
- ◆ 蒼音
- ◆ たえなかず
- ◆ 高木一由
- ◆ 多香子
- ◆ 高階しうす
- ◆ たかはしりおこ
- ◆ 瀧口美和
- ◆ 竹内亮
- ◆ 武田ひか
- ◆ 竹林ミ來
- ◆ 田中翠香
- ◆ 田斗かき
- ◆ 千束
- ◆ 茅野
- ◆ 千原こはぎ



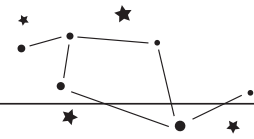
アクリルの板に囲まれほつとする僕は空の水槽の魚
 片脚が折れてしまった虹もある空の青さについてゆけずに
 レグホンの無数の霊がひしめいて曇った空を温めている
 チャート式 埋められなかった空欄に大きなマルが遺されて、春
 きみのひざまぐらで空を見上げてるぼくにかさなり影がちかづく
 夜という透明な盾 ふりそそぐ宇宙すべてを受け止めている
 忘れっぽい伽藍堂に見せている「きみは空です。それは満月」
 空色のシャツを着るには嘘つきなあなたが食べるミルクレープ
 さっきまでシロクマだった雲がもう形を変えた あれは群馬だ
 水面に映る空には映らない川 君の目の先にはあの子
 「あっぱれ」は末広がりになる声のアッパレ天晴れ野に陽射しのみ
 とりどりのふうせん空へ解きはなちピエロが春を祝福してる
 天空へ痛みを飛ばす 見上げれば夜でも雲が白いと気付く
 はじめましてお世話になりますとびきりの笑顔で空と海へ挨拶
 星空に祈る言葉もないけれど流れ星ただ見つける遊び
 空色の色鉛筆は持っているその他の色は全部なくした
 神さまにたとえばここにいてほしい飛行機雲が空ぶっ刺して

- ◆ chari
- ◆ 月丘ナイル
- ◆ 月硝子
- ◆ 梅雨崎ナノカ
- ◆ 天国ななお
- ◆ 堂那灼風
- ◆ 遠山文
- ◆ omeo
- ◆ ともえ夕夏
- ◆ 内藤絡
- ◆ 中村成志
- ◆ 夏本橙
- ◆ 波よこに
- ◆ なるなる
- ◆ 新妻ネトラ
- ◆ 西淳子
- ◆ 西村曜



ヘリコプター空をかくはんして去ってもう街じゅうが空です 翔べる
 憧れの比喩たる「雲の上」を超え踏み台にしてゆけよロケット
 訳を訊く人の多くてもう空を好きと言わずに無難に生きる
 スマホから撮ろうとしてた夕焼けが映りを意識していてやめた
 この空は悲しい嘘と飴色のプラスチックでできております
 『成人』に溺れかけてて息継ぎのように必死で空を見上げる
 銭湯と神社の裏の路地らしい路地から順に夕暮れが来る
 寝ぐずりの幼子と空見上げれば飛行機雲が明日へむかう
 ゆうやけの仕組みを知らぬから西の空に火をともしひとを想う
 青空にこだまする言葉ラテン語で夜中はメディア嫌いはオディム
 小一時間 留守にしていると分かるよう空から雲をぜんぶ消しとく
 あのひとと花火に行くって聞いたからぐずった雲を引き止めてます
 この空が青なのか私の青がこの色なのかどちらでも、青
 別れの日空の青さの不可視にも空気の底に背中を丸め
 どの空を見上げていたか教えてよ古い本棚探す面影
 階段を駆け上がったら雨空で傘開くとき「ばきゅん」と小声で
 絨毯も二段ベッドも地球儀も電子ピアノもない南部屋

- ◆ ネコノカナエ
- ◆ 根谷はやね
- ◆ 野添まゆ子
- ◆ 薄暑なつ
- ◆ 薄荷。
- ◆ はばとび
- ◆ 春陽
- ◆ 春ひより
- ◆ ひーろ
- ◆ 人々ひとり
- ◆ 雛河 麦
- ◆ piyomaru36
- ◆ 平井まどか
- ◆ 笛地静恵
- ◆ 福山桃歌
- ◆ ふうみうり
- ◆ 古井久茂



テーマ詠「空」

空駆ける羽胸に抱き恋の歌学びの歌を三十一文字に
乾ききった冬空白一筋残す機体独り見上げてなぞる
そらいろのクレヨンおいクレヨンは夏のあいだに短くなるね
くれるならきみがちぎった一片のなんでもない日の空をください
空を見て最初に思い出していたあなたに僕を許してほしい
願うこと全部が星にならないよ だけど、そうだね 流星群だ
アバターで星空見せてくれたよね流れ星も良くできてるねって
テーマ詠「空」と言われて見上げれば空、どこまでも空、どこまでも
降りそうで降らない空にたいくつな傘がコツコツ地面を歩く
後悔の YESTERDAY を塗りつぶす海辺の空には YES しかない
風船が空に溶けてくお砂糖における紅茶と同じ原理で
飛行機の飛び立つ先に僕はいない空を見上げて妄想の旅
空になる梅にメジロが飛んできて新幹線の通った日から
懸命にふらここを漕ぐ青空につま先少し染まるくらいに
無明より帰る探査機我にまだ人の世留まれと論し居り
朝焼けの雲は紫 この空に逝ければきつと幸せだろう
ほとんどの空港駅は終点で世に目的のあるひとばかり

- ◆ 細川エリカ
- ◆ 歩歩
- ◆ まきぞの
- ◆ まこ
- ◆ 真島朱火
- ◆ 松本ユミ
- ◆ 真野ありか
- ◆ 御糸さち
- ◆ 三浦なつ
- ◆ 深影コトハ
- ◆ みずき
- ◆ みそのみそ
- ◆ みつてる
- ◆ 衣未
- ◆ 宮木水葉
- ◆ 宮嶋いつく
- ◆ 虫武一俊

夕映えにちいさな影を立たしめて少し離れて眺めておりぬ
消えてゆく夕空が好き 吸ひこまれ生まれる前の光の中へ
月に手は届かぬけれど空になら 境界線のなき空ならば
「ドラえもんブルー」と名付けられた色それはまっさらに晴れた空色
大空のふかみへと飛ぶ鳥がわがころの端を啜えていきぬ
空に触れるように背伸びをしてきみの心に少し近づいていく
どちらかの願いは叶う快音とともに見上げる春の蒼穹
空を舞うポリ袋さえ自由に僕ら中央線に囚われし天使
二十歳過ぎ絵の具まみれの中学のジャージは今日も風ぐ空の下
やわらかな光に君は駆け出して空に向かって両手広げる
閉ざされたワタシの空は真っ暗で月を探してまた泣いている
そういう雲が午後にはあってねむいときねむいと呟けるアカウント
摩天楼が地空に線を引いてゆく淀川から見る赤い明滅
がうがうとこゑあげながらあをぞらをふたつにわかちゆく戦闘機
今ぼくが笑みをこぼした変な雲つかれたきみの空まで届け
怪獣とクリームソーダあの頃は空が飛べなくなつてよかった
君を呼ぶ声はお空がのみほした夜をうつした酒をひとなめ

- ◆ 六厭めれう
- ◆ 村田一広
- ◆ 八重森さくう。
- ◆ 山上秋恵
- ◆ 山川仁帆
- ◆ 結川澄衣
- ◆ 遊糸
- ◆ 遊星
- ◆ ゆりこ
- ◆ 横雲
- ◆ 夜花
- ◆ 夜夜中さりとて
- ◆ うま
- ◆ 龍翔
- ◆ ルオ
- ◆ 若枝あうう
- ◆ 渡邊知博

短歌リレーコラム 望遠鏡 ①

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 牛隆佑

電話越しに野原の野ですと告げるときその野に咲かせてほしいハルジオン (羽島かよ子)

いい歌です。状況としては、たとえば職場で隣の席の同僚の野本さんが電話をしているのでしょうか。自分の名前の漢字を相手方に正しく伝えるために『野本』の『野』は『野原』の『野』です」と伝えたのでしょうか。それは仕事上の事務的な動作なのだけれど、その時の野原にせめてハルジオンが咲いていればいい、というのが基本的な読みでしょうか。あるいは告げるの主語が自分でもいいですね。電話越しの相手が私の『野』の言葉を受け取ったときに、その人が

イメージする野原に、ハルジオンがせめて咲いてほしい、という。

この一月の終わりに仲間を誘ってzoomを用いて歌会をして、その時の羽島かよ子さんが提出した短歌でした。集まったメンバーは九名で、提出は自由詠を一首。選はそれぞれ二首選を行い、そしてこの短歌は〇点でした。このことをみなさんはどうお感じになるでしょうか。もちろん歌会の得票は主観的かつ相対的な評価であり、その場限りの偶然の結果でしかありませんが、割と多くの方が、(まあいい歌だし〇点でなくともいいけど〇点でもおかしくないかもな)と思つたのではないのでしょうか。少なくとも僕には歌会の結果としては意外には思えませんでした。

歌会ではもちろん評価の声もありましたが、批判的な意見は要するに「新奇性がない」「類型的である」というものでした。妥当な批評です。「野原」「ハルジオン」などのキーになる個々の名詞もそうなのですが、短歌としての展開も構文的とも捉えられるくらいには型通りなのです。そして構文的であるということは、「野原」「ハルジオン」の語を入れ替えて、歌人によるポエジーを競った大喜利ができます。マナー違反ですが、やってみます。みなさんもちよつと考え

てみてください。

電話越しに焼け野が原の野ですと告げるときその野に植えてほしい樺の木

電話越しに野球の野ですと告げるときその野を駆ける周東右京

電話越しに野武士の野ですと告げるときその手に長巻構えておりぬ

僕が挙げた例が面白いかどうかは別としても、もし「野」の字に拘らなければ、バリエーションはさらに無限に展開できます。このような視点で見ると、つまり該当歌の「野原」と「ハルジオン」は必然性と共感性の高さはあるものの、いかに模範解答的で「普通」であるかが判ります。

ところで、大喜利とえば、歌会仲間に木曜何某という大喜利のプレーヤーがいる関係で、数年前はよく大喜利を観にいつていました。一、二回ですが実際に参加したこともあります。一度、大喜利を観戦してみるとよく分かりますが、大喜利は知性と感性をフル活用した個人戦のゲームであると同時に、司会や回答者、オー

テーマ この前の歌会でちよつと思つたことがあつたんですよ

ディエンスまでもが一緒になつて場を作つていくチームによるショーでもあります。どうやら、回答には流れというものがあるようです。どうやら、お題が発表されてまずテンポよく提示される第一答は、多くが「そうそう、そういうこと」と頷きたくなる答えで、その後にはそこからの応用の答えが挙がり、そこから次第にアプローチを変えて展開しながら、お題そのものから離れていきます。そうして場のグルーヴがコップの水がぎりぎりまで漲るように最高潮に達したころに、誰もが予想できなかった、かつその上で、一瞬で腑に落ちる回答が出され、会場は爆発します。

僕がもつとも印象に残っている回答は、人々がピクニックしているイラスト(下図みたいな)に、何か一言を添えてください、という題に対しての「パラシュートが開かないので、もうこの瞬間を楽しみたくないです。現場でこの回答を聞いた時には衝撃でしたし、会場の沸き方もそれは激しかったのです。しかし、いまこの文章を読み直しても、あまりピンとこないはず。文字上では面白さの熱が伝わらない、というのはもちろん大きな要因ですが、それに加えて、その解答に至るまでの流れの欠落も大きいはずです。現場での第一答えが、上記の答えだつたらどうだつたと考えられるのでしょうか。少なくとももつと戸惑いの色が増えるのではないかと思います。



「パラシュートが開かないので、もうこの瞬間を楽しみたくない」

短歌の話に戻ります。僕はやつぱり冒頭の短歌は、いい歌だと思つたのです。それも絶対的に。歌会には色々な側面があつて、その一つはプロフェッショナルな実験場というもの(特によく見知つた者同士だ)なので、その観点でいくと、前述の通り当該歌が〇点だつたことは理解できます。でもたとえば、それまで短歌に触れてこなかった人がはじめて手にとつて開いた歌集のその巻頭にこの一首があつたら、その人の胸中にぶわつと風を吹かせて、感動させてしま

ある短歌が、モチーフとオマージュと引用と模倣と類想とバリエーションとインスパイアとパロディやその他の数限りない積み重ねを経て、「爆発」に至るのだと考えると、もしかすると、実は最も不足しているのは模範解答的短歌なのかもしれません。私たちはもつと凡庸な歌を、その凡庸さを恐れずに作り続ける必要があり、それがいつかだれかの「爆発」に繋がっているのだと、そう思います。そしてそのためには、新しく知つた短歌がまるで何度目かの短歌のようであつたとしても、その度に「これはいい歌だ」と積極的に評価していく姿勢を、社会的に歌人と呼ばれる人やその自負を持つ人々には期待したい。少なくとも、僕は毎回毎回、「うわっこれはいい歌だ」と受け止められる精神性を保持していきたいなあ、と思つたのです。

最後に、こんな失礼なカたちでの引用を許諾してくれた羽島さん、ありがとうございます。歌会では色々言いましたが、あれからじっくり考えなおすとやつぱりこの歌はいい歌だと思いました。

誰かが髪を切つていつか別れを知つて 太陽の光は降りそぐ
ありとあらゆる種類の言葉を知つて 何も言えなくなるなんてそんなバカなあやまちはないのさ!

(小沢健二「ローラースケート・パーク」)

次号予告

8 首の連作 自由詠

テーマ詠「緑」

短歌リレーコラム「望遠鏡」

リレーエッセイ「いちごいちえ」

うたそら 第2号



短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください

<http://kohagiuta.com/utasora/>



第2号 21 4/30(金) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「緑」1首

第3号 21 6/30(水) 24時

●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「遊」1首

編集後記

このたびは短歌誌「うたそら」創刊号へのご参加、ありがとうございます。おかげさまで無事、発行まで辿り着くことができました。ご寄稿くださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

第1号の参加歌人さまは211名、連作欄には148名、テーマ詠には187名のご投稿をいただきました。わたしが予想していたよりとてつもなくたくさんのご参加をいただき、嬉しいやら恐縮するやらですが、歌人の皆さまには新しい作品発表の場を提供でき、読者さまにはまだ知らない歌人さんのすてきな作品に出会える場となりました、これ以上の幸はありません。

今回のテーマ詠のお題は「うたそら」にちなんで「空」。青空から雨空、星空など、短歌で描くことのできるさまざまな空をお楽しみいただけたらと思います。また、リレーコラムのトップバッターは牛隆佑さん、リレーエッセイは千原が担当しております。次の方へバトンをつないでいく読み物ページも、ぜひお楽しみに！

次号は4月末メ切の5月初旬発行、テーマ詠のお題は「緑」です。新緑の季節の始まり、皆さんの力作のご投稿をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ

うたそら創刊号発行の記念として、
うたそら第1号ご投稿者様、読者様の
なかから抽選でそれぞれ
1名様へ、歌集をプレ
ゼントいたします。ふ
るってご応募ください。



歌集プレゼントの
お知らせ

ちるとしふと
千原こはぎ

書肆侃侃房・新鋭短歌シリーズ39

それはやっぱりすきなのですか

新作を含め350首を収録

表紙・裏表紙・本文イラスト描き下ろし

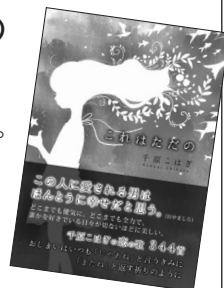
監修・解説：加藤治郎

それぞれ
1名様

これはただの
千原こはぎ

この「好き」は甘くない。

恋の歌344首収録。
全ページフルカラー、
文庫サイズでお届けします。
解説：嶋田さくらこ
帯とコピー：田中ましろ



◆応募方法

歌集プレゼント応募フォーム

<https://forms.gle/4bPP2mNeFh1KQoTY7>
から必要項目を明記の上、ご応募ください。

◆メ切

3月31日(水) 24時

◆発表

ご本人へメール or DM

にてお知らせ



たくさんのご応募
おまちしております！

はばたきの音が聞きたい春さきの空にあつまる歌のつばさの



千原こはぎ

リレーエッセイ

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

書き手

空

千原こはぎ

ほどありました。もちろん「空」や「空き缶」なんかの文字列も含んでいるけれど、まああの数なのではと思います。他にも「晴れ」「雲」「雨」「雪」など、空に関係する言葉を含めて探してみると合計で1000首を超えました。他の方の比率がわからないので比べようがないけれど、わたしにとって空はふと歌に入れたくなる身近な存在なのでしょう。

新しい短歌誌を作りたいと思ったとき、その名前を考えるのにひどく苦戦しました。Twitterのアイコンのせいもあって、わたしには長年「鳥キアラ」が定着しています。開く歌会は「鳥歌会」だし定期発行のネットプリントは「とり文庫」といった具合です。今回もなにか鳥関係の言葉かな、と一瞬安易な考えが浮かんだけれど、すぐにそれはないな、と思い直しました。この短歌誌はわたし個人の本ではなく、たくさんの方と作り上げる場。短歌を始めたばかりの人もベテランの人もみんなを大きく広く自由に包み込んでくれるようなものがない。そうしてそこでわたしも一緒に楽しく羽ばたかせてもらいたい。「うたそら」はそんな思いから出てきた誌名でした。けれど、そんなりと決まりませんでした。わたしはこういうときに「空」という言葉を使うのがあまり好きではないからです。

不思議です。空が好きだし、空を短歌に詠み込むのも好きなのに、なぜ、誌名にするのはこんなにも躊躇してしまうのでしょうか。なにかほかにもつと、しつくりくるものはないか、しばらく悩んでいたけれど、結局「うたそら」より良いと思えるものは浮かびませんでした。逆に、誌名を「うたそら」にした場合の具体的な紙面デザインが次々と浮かんできて、早く組みたいなあとわくわくしていました。

自分のなかで少し違和感はあるけれど、ここまで脇から（デザインから？）固まってしまっただけで仕方ない。新しい短歌誌の名前は「うたそら」になりました。その後Twitterで告知をし、たくさんの方に「うたそら」と呼んでいたこと、で、だんだんと自分のなかでもその名前が馴染んできて、今となっては「うたそら」以外考えられないのだから、人間というのはいい加減なものです。（わたしがいい加減なだけか）

そういうわけで、短歌誌「うたそら」は始まります。編集長ならぬ編集鳥として、空を見上げるようにふとしたときにばらばらと眺められて、晴れの日も雨の日も自由に短歌を楽しめる場になるよう、微力ながらがんばります。みなさま、どうぞよろしく願っています。

The background is a solid teal color. In the upper half, there are two horizontal, wavy white lines. Below these, a multi-colored rainbow arches across the center. The lower half of the image is filled with various-sized, semi-transparent white circles of different shades, creating a bokeh effect.

うたそら 第1号

発行：2021.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com>